



338
181

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ^{cm} 30 1 2 3 4 5

始



2.7.12

338-18/



姫



アレキサンダー、小ジユマ作
三原天風譯

大正
2. 7. 10
内交

序 文

◎本書は小デューマの脚本 Die Kamelien Dame を翻譯して別に小説椿姫の卷末に收めたる手紙を附譯して、一篇の物語り體になしたるものなり。

◎勿論、其の會話に至りては、殆ど全篇を其の儘に譯了せり、寧ろ是れを説明的に延せし所はあるも、省畧せし所は甚だ尠し。

◎此の「椿姫」一篇は、事實世にありたる事にして、是れに加ふるにデューマの創作的構想を以てせり、佛國の劇中最も世に知られたる

ものゝ一なり。

◎譯者が本書を公にせしは、「椿姫」の如き浮き稼業の婦人の中にも、亦戀の犠牲となりて顧ざる純清なる思想の存する事を、世人知しめんがためなりき。

◎滔々として婦徳の日に頽敗しつゝある昨今、斯くの如き人情教育の書を世の多くの子女に紹介する事は又無益の業にあらざるべし。

七月一日

譯者識

アレキサンドル・小ヂユマ略傳

◎アレキサンドル・小ヂユマは千八百二十四年六月二十八日に佛京巴里に生れた、父はアレキサンドル・ヂユマ、母は白耳義生れの、カテリーヌ・テブレと云ふ婦人であつた。

◎父なる大ヂユマは政治に熱狂して居た人で、随分彼方此方と漂浪して居たから、兒の教育など云ふ事は、殆ど念頭に置て居なかつた、否、否、父なる大ヂユマは此の小ヂユマが稍成人する迄は、自分の兒としての認知すら與へてなかつたのである。

◎されば小ヂユマは、母の手一つに教養せられて、幼にして諸所の私立小學校に學び、後ブルボン高等學校に入學した、此の在校中にも彼は嶄然群少年の間に頭角を抜いて居たのである。

◎皮れが初めて其父なるデユマに知られたのは、此の時の事である。

◎卒業後初めて、一篇の詩集を公にしたが不幸にして其の文才を認められなかつた其の後彼は父に伴はれて、諸國を旅行し歸後千八百四十七年に小説一篇を公にした

◎翌四十八年小説「椿姫」外二篇を公にし爾後約十年間盛に小説に筆を染めた。

◎「椿姫」を戯曲として公にしたのは千八百五十二年である、是を手初めに、各種の戯曲を公にして、千八百六十六年まで劇の方面に於ても勢力を揮つて居た。

◎千八百七十四年佛國學士院の會員に擧げられ、文豪としての價値を世に認めらるゝに至つた、そして同じ九十五年十一月二十七日、七十一歳の高齡を保つて逝去した。

◎一代の作物は頗る多いが、次に列擧する作の如きは世に持囃されて居るものである。

Le Demi-Monde
pour l'histoire

Denise.

Francillon.

Die Fremde.

Ein Freund der Frauen. (L'ami des femmes)

Die Kameliendame.

Der Naturliche Sohn.

Vater und Sohn. (Le père prodigue.)

◎彼は父が史實小説、傳奇小説に於て成功したるに反し、寫實小説に於て成功し、十九世紀の文豪として、佛國文學史に其の名を不朽に留めて居る。

小説 椿姫 目次

	目	次	1
(1)	巴里第一の美人……………	男と云ふ男は引付ける……………	一
		成て呉れ……………	
		賢澤の仕度い三昧……………	
(2)	私は椿姫……………	嫌な安孫子男爵……………	八
		椿姫と云ふ名を御存知……………	
		は御免……………	
(3)	二年以来の戀……………	青年 藤原増男……………	二四
		しい方……………	
		嫌な男には嫌味許り……………	
		木統にお優……………	
(4)	唯だ兩個で……………	ダンスにも堪えぬ……………	三三
		を語る……………	
		外の方と結婚なさい……………	
		増男意中……………	
(5)	此の花をお取りなさい……………	銀一つを記念に……………	三三
		しましやう……………	
		妾は長生が出来ぬ……………	
		一生運愛……………	
(6)	互に思はれつ……………	公爵よりの二千法……………	四二
		の計畫……………	
		唯つた八日たのに……………	
		田舎行き……………	

(20) 戀に負て賭に勝つ……………
 嫌味を並べる……………男爵と増男の勝利……………(一四九)

(19) 別れて後……………
 今一度遇い度い……………死んだ兩個の過去……………(一四四)

(18) 我家に歸る……………
 磨利子の手紙……………我家にさまだ夢は覺めぬ……………(一四一)

(17) 父の苦言……………
 家名の汚れ……………理非を説く……………終に決心す……………(一三三)

(16) 餘所ながら暇乞……………
 書きかけの手紙……………お前の心は判つて居る……………再び父の來訪……………(一三三)

(15) 夫では別れまじやう……………
 一思いに殺して下ろさ……………今の信も寂くなる……………では別れまじやう……………(一二二)

(14) 全然切れて呉れ……………
 乃公の勸進へちやつた……………妹の結婚に差支ゆる……………一時の別れては不足ぢや……………(一〇六)

(13) 思もかけぬ増男の父……………
 入る早々無禮の言……………磨利子も堪え兼ねる……………道具屋の書付まで見せる……………(一〇一)

(12) 磨利子の決心……………
 結婚は仕ない……………億んな幸福はない……………實素な暮をする積り……………(九〇)

(11) 生活上の不安……………
 磨利子の心配……………身の周りのものを賣る……………増男にも同じ考へ……………(八四)

(10) 公爵と絶交……………
 増男と手を切れ……………沖も夫れ程長活は出來ぬ……………人間が一變した……………(八一)

(9) 老公爵の憤り……………
 田舎の別荘……………密の様な二人の仲……………金の道が杜絶えた……………(七六)

(8) 眞實の男を見た……………
 再び増男と會見……………磨利子心中を明す……………田舎行の決心……………(六六)

(7) 破裂の手紙……………
 伊知地伯爵……………一萬五十分の無心……………別れの手紙……………(五六)

(21) 衆人の前で耻辱………磨利子と増男………僕と一緒………忽ち一場の騒動……………(一六四)

(22) 病床の磨利子………加藤の親切………来訪………結婚の招待状……………(一七四)

(23) 磨利子の臨終………武正よりの手紙………増男歸………幸福なる最期……………(一八九)

(24) 磨利子の手紙「一」より「十一」迄……………(二〇三)

(25) 小間遣の手紙「一」より「五」迄……………(二三三)

目次終

小説 椿姫

アレキサンダー・小チユマ作
三原天風譯

一 巴黎第一の美人

巴黎第一の女優と讃へられて、世の喝采を一身に背負つて立て居た郷地磨利子も近頃は兎角健康が勝れず、舞臺を退いて只管静養を事として居る。

けれども、一流の女優と言はれ、絶世の美人と讚美えられる程あつて、磨利子の周圍には絶えず男が附き纏つて居る。

何時か磨利子が保養のため温泉に行て居た時なども、毎日の様に知らぬ男が、密と尋ねて来て、附添ひの女中から、磨利子の容體を聞いて行た事もある。爾うかと思

ふと森谷公爵と云ふ老人なぞは、自分の娘分にしやうの、年金をやらうのと、色戀
ひを離れて申込んで来た人さへある。

兎に角、磨利子程、巴里の男と云ふ男の心を惹き付けた婦人はあるまい。

今日も今日とて、磨利子の餘り妙かぬ安孫子男爵と云ふが、磨利子の留守中に來て
小間使の波子を對手に話をして居る。

波子が彼方此方と部屋の中を取片づけて居ると、安孫子男爵は人待ち顔に、スト
プの前に腰をかけて、磨利子が最う歸るか、最う歸るかと待て居る。

すると突然、玄關の方で鈴が鳴た、

男爵「誰れか來た様ぢやないか」

波「いゝえ、あれは、此處の下男が開けたのでしやう」

男爵「爾うちやない、磨利子が歸て來たのだらう」

波「いゝえ、未だお歸りになりませんわ、磨利子様は十一時半にお歸り遊ばす筈で

すわ、未だ貴下辛と十時ぢやありませんか」

爾う言て居る所へ入て來たのは磨利子が仲良しの友達美知子である、美知子も以前
磨利子と同じ劇場に出て居たが、女優として餘り成功仕そうもないので、近頃は情
夫と一緒に成て楽しく暮して居る。

美「あら、磨利子さんはお留守？」

波「ハイ、何か御話に入來したのですか」

美「否え、恰度通り掛りましたものですから、鳥渡御見舞に參りましたの、——で
は又參りますわ」

波「あら、可いちや御座いませんか、直にお歸りになりますわ」

美「あの岸田が下に待て居ますから、又參りますわ、左様なら……」

岸田と云ふのは美知子の情夫で、磨利子とも懇意な間柄である。

美知子は波子と安孫子男爵に會釋して出て行つた、後で男爵は波子に向ひ、

男爵「波ちゃん、あの人は誰れだね」

波「あの方は美知子さんと言ってね、磨利子さんのお友達なのよ」

男爵「あの娘は中々美人だね」

波「そして品行も良いのよ……」

男爵「ちや、先刻岸田が待て居ると言つたのは、ありや誰れの事だね」

波「御亭主よ、でも未だ表面の御亭主ぢやないの、近々の中に晴れて一緒になるんですつて……」

男爵「ハ、ハ、ハ、情夫があつて、然も品行方正と来て居るから、凄まじいや。夫れは夫れとして、波ちゃん、磨利子さんを手に入れる方法はあるまいかね」

波「知りませんよ、那樣こと」

男爵「磨利ちゃんも、あの森谷公爵なぞ云ふ老爺さんを對手にして居て、外のものを袖にするのは、よくないねえ」

波「あら、あの阿爺さんは、磨利子さんを自分の娘の様に思て居るのよ、……磨利子さんも亦、阿父さんの様に思て居るわ」

森谷老公爵が磨利子を我が兒の如くに思つて最負にして居るのは、決して色戀ひに關係した事ではない、

一昨年の事である、磨利子は兎角健康が勝れず、劇場にも思ふ様に出られないので小間使の波子連れて温泉に行た事がある、其の時磨利子と同じ齡頃の令嬢が、同じ温泉宿に来て保養をして居たが其の時は最う大分重態であつた。これぞ、森谷公爵が唯だ一人の令嬢であつた。

令嬢は、父公爵や、お付きの人々が心を籠めた介抱も其甲斐なく、哀れや其の宿で終に息を引取つたのである、令嬢の亡つたために甚く力を落した老公爵は、或る日の事、同じ宿に居る磨利子が齡頃と云ふ顔付と云ひ自分の娘に生寫しな程似て居るのを見て、終に侯爵の方から、何卒是からは心易くして呉れ、成るならば乃公の娘

分になつては呉れまいかと、磨利子に頼んで見た、其の時、磨利子は、
「妾の様な卑しい稼業を仕て居るものでもお構ひなくば、喜んで御懇意に仕ていた
います」と言つた。

爾來、公爵は毎月毎月磨利子に多額な金をやつて、自分は、阿父さん振て得意にな
つて居る。

けれども、幾干顔形が似て居ても、公爵の令嬢と女優である、心まで似て居る道理
はない、是には公爵も飽足らす思つて居た。

其結果、終に公爵の方から磨利子に注文を出した、

「お前職業換へを仕て呉れまいか、お前が今の職業を止めて呉れば、何ん事でも
も慥へてやる」

「では妾、爾う仕てよ」

話は終に纏つて、磨利子は其の積りで巴里へ歸て来たが、然し今迄華かな女優生活

に慣れて居た磨利子は、矢張前通り放埒な女優生活を止めなかつた、

「磨利子、お前は矢張り以前の職業を止めて呉れないな、夫れでは、乃公の満足は
充分と云ふ譯に行かぬ、仕方がないから、今までの年金を半分にしやう」

恚う言ふ宣告を受けたので、贅澤に暮して居た磨利子は少からず借金を拵えた、現
に彼は今五萬法からの借金を背負て居ると云ふ始末である。

其の借金を安孫子男爵が拂てやらうと豫て言て居るけれど、磨利子は、安孫子の恩
になる事をイヤがつて居る、

今も男爵と波子は、其の金の事で互に言ひ争つて居る、

波「あの借金を貴下が拂て遣らうと被仰つても、磨利子さんは嫌がつて居るのよ」
男爵「那樣ことを言へるのも伊知地伯爵と云ふ人があるからだらう」

波「本統に貴下は嫌な方ねえ、伊知地の御前は、唯だお友達と云ふ關係に過ぎない
のよ……」

安孫子 御前様 何かお話しなす
おれんてんてん

男爵「何！お友達だ！へん、巧く言てらア」

波「本統に貴下はお口が悪い、……おや、誰れか来た様だ、鈴が鳴るわ、あゝ、

磨利子さんだわ、貴下今の事を言つてよ」

男爵「イヤ、言ては困る、内証だ、内証だ！」

慙う言て居る所へ、磨利子が歸て来た。

「三」私 は 椿 姫

嫌な安孫子 男爵……椿より外の花は御免……椿姫と云ふ名を御存知

磨利子は安孫子男爵が自分の留守中に來て居るので、尠らず不快な感に打れた、慙

う云ふ女優の様な職業を仕て居るもの、傍には、必ず慙んな嫌な客の一人や二人は

來て居るのであるが、此處に來て居る安孫子も其の類に漏れぬ一人である。

磨「波ちゃん、御夕飯の仕度を仕て置いて頂戴、今に織江さんと郷田さんが在つしや

る筈だから……、おや安孫子さん、貴下……」

男爵「待て居たのが悪かつたかね」

磨「妾、何うして爾う貴下に許り遇ふんでしやうねえ」

男爵「まア明瞭と來るなと言はれる迄は來るんだね」

磨「本統に何時だつて、貴下の在しやらない例はないんですもの、……一體何の

御用ですの」

男爵「知てる筈ぢやないか」

磨「何時もお極りですわねえ」

男爵「ちや、貴女を愛しちや悪いと云ふ譯かね」

磨「成程ね、何人でも被仰る事よ、だけど安孫子さん、妾、人様の被仰る通りに成

て居たら、御飯を喫る暇もありませんわ、幾度も五月蠅く言ふ通り、貴下のお言

葉には従はれませんのよ、……そりや貴下が唯だ來て待つて在しやる分には差支

えはありませんけれど、貴下が妾を情婦扱ひになさらうと云ふのならば、最うお

断り仕ますわ」

男爵「けれども磨利さん、貴女は何時かバヌエールで遇った時、私を喜ばせる様な事を言つたぢやないか」

磨「ソリヤ妾、病氣で退屈も仕て居ましたから、氣晴しになる様な事も言つたかも知れませんが、けれども今は違ひますわ」

男爵「成程解つた、貴女は森谷公爵と良い仲に成て居るから、夫れで那樣ことを言ふのでしやう」

磨「まア、イヤな……」

男爵「ぢや、伊知地伯爵を好いてるのでしやう……」

磨「妾、自分で好きだと思ふ方を愛するのは勝手ですわ、貴下のお世話は要ませんわ、最う那樣ことを五月蠅く被仰るのならば、何うぞお歸り下さい……」

男爵は部屋の中を唯だ一人彼方此方と歩いて歸り相にも仕ない。

磨「貴下歸り度くないのならば、ピアノでもお弾なさい、ピアノだけはお上手ねえ」

男爵「何を弾うかね」

磨「何でも可いわ」

男爵はピアノの臺の前にかけて、ピアノを弾き出した、實に此の男爵、ピアノだけは確に上手である、

磨「本統にピアノは巧いのねえ」

男爵「兎に角、音樂師としての給料は八萬法だからね……」

磨「爾うでしやうよ、妾は唯だ百法だわ……」

其處へ小間使の波子が入て來た、

磨「波ちゃん、御飯のお仕度出來て」

波「ハイ、お仕度をいたしました」

磨「お前お兼さんに遇はなくなつて」

波「今夜来つしやるてお話ですわ、夫れから先刻美知子さんも入来し
お醫師様も入来しやいましたわ」

磨「御醫師さんは何とか言て？」

波「ハイ、あの静かに、寝んで在つしやる様にと、被仰いましたわ、夫から花束を
何人か届けて来ました」

女優に花束を贈る事は西洋では慣習になつて居る、磨利子が劇場を休んで居ない時
には高價な花束が一日に幾個贈られるか知れない。

男爵が突如として横から口を出した。

男爵「ハ、ハ、そりや、僕が贈つたのだ」

磨利子は、今しも波子の持て来た花束を手に取て見て、

磨「まあ、薔薇に白い蓮翹だわ、波ちやん、持て行てお前の部屋にでも挿してお置

け」

男爵「磨利さん、貴女は其の花が氣に入らないと云ふのかね」

磨「貴下、妾の名前、何と云ふか御存知？」

男爵「知てるさ、郷地磨利子ぢやないか」

磨「爾うちやないんですわ、妾の綽名よ」

男爵「椿姫ぢやないか」

磨「何うして椿姫と云ふのでしやう」

男爵「椿より外の花は持ないからさ」

磨「それ御覽なさい、だから、妾外の花を下すつても駄目よ、外の花は香を嗅いで

も病氣に成て了ふわ、波ちやん、其花束、彼方へ持てお出よ」

男爵「イヤ、そりや相濟ん事を仕た、ちやお暇をするか」

爾う言て居る所へ、磨利子の友達の織江と郷田と云ふ紳士が入て来た。

9th

『三』 二年以來の戀

青年兼増男……本統に優しい方……嫌な男には嫌味許り

磨利子は友達の織江と郷田が入て来たので、急に氣が引立つた様子である。

磨「あら織江さんと郷田さん、よく來つしたのねえ、妾最う來つしやらないのかと思て居たわ」

織「來られなくなつたのは、全く此の方の故よ」

織江は笑ひながら郷田を指す、

郷「何でも彼でも、我輩の故に仕て了ふから閉口さ、やア、安孫子君、君來て居たのか、君も一緒に食事を仕ないかね」

磨「いゝえ、安孫子さんと一緒に妾、嫌よ」

安孫子男爵は、散々の態である、

此の磨利子の住つて居る家の直ぐ向ふ側にお兼と云ふ裁縫屋が住て居る、此のお兼

には磨利子が常々目をかけて居る、磨利子は此のお兼をも呼んで一緒に食事を仕やうと思て、窓から聲をかけて見た、

磨「お兼さん」

お兼は向ふ側の家の窓から首を覗けて、

兼「何です、何か御用」

磨「貴女入來しやらなくつて」

兼「妾、行けないのよ」

磨「何うして來られないの」

兼「あのねえ、お若い旦那方がお二人在つして居るの、今御飯を食つて在つしやる所なの」

磨「爾う、では一緒にお連れ申して來つしやいよ、何て方？」

兼「貴女御存知の加藤さんと、其のお友達よ」

「磨爾うでは直ぐと入来しやいよ」
 向ふ側のお兼は、間もなく二人の紳士を連れて来た。此の一人は本年二十四歳になる葦原増男と云ふ美男子、父は此地の税務長を務めて居る、今一人は加藤進とて、本年二十八歳、葦原とは極の親友である。
 椿姫と言はれる磨利子は毎日此の様に多数の若い男女を集めて、唯だ譯もなく、夢の様な其の日其の日を送る居るのである。
 素より、今迄に、幾十人となく自分を戀ひ焦れて、慕ひ寄つた男はあつたけれど、磨利子は一人として心を許したものは無い。
 然るに今此處で初めて遇つた葦原増男と、深い戀中に陥ちる様にならうとは、固より初めから氣付う譯はない。
 加藤進の方は、以前から磨利子を知居たので、唯だ普通の挨拶を仕居る、けれども、増男は磨利子には初めての面會なので、お兼が氣を利かして紹介の勢を取つた。

「磨利子さん、此の方、葦原さんと云ふお方なの、此の巴里中で、此の方位貴女を慕つて在つしやる方はないのよ」
 磨「まア、よく入来て下さいました」
 磨利子は手を延べて、増男と握手する、

先刻から葦原の方許り見て居た老紳士郷田は、葦原に向ひ、

郷「貴下は葦原さんと被仰る相ですが、ではあの税務長をして在つしやる葦原さんの御親戚ですか」

増「ハイ、あれは僕の父で御座います、貴下は父を御見知りで御座いますか」

郷「イヤ、或の男爵夫人の所でお目に掛つた事があります、あ、夫れから貴下の阿母さんにも乃公はお目に掛つた事があります、奇麗な方だな……」

増「イエ、母は最う三年前に亡くなりました」

郷「お、夫れは夫れはお氣の毒な、で、貴下はお一人子ですか」
増「ハイ妹が一人御座います」

兩個は尙ほも何か語りつゝ、廊下の方へ出て行つた、
後で磨利子は、増男の友人なる加藤進を呼びて、低聲で、

磨「加藤さん、あの方本統に様子の可い方ねえ」

加「夫れ許りぢやないよ磨利子さん、葦原は貴女を非常に慕て居るのだから……
ねえ、お兼さん、嘘ぢやないねえ」

兼「え、何がですか」

加「あの増男君が磨利子さんに熱心だと云ふ話を、磨利子さんに仕たのさ」

兼「そりや嘘ぢやないんですよ、譯と言って別にありませんけれど、唯夢中なのよ」

加「夫れに、あの男は、初心だから、夫れを磨利子さんに打明ける事が出来ないの
だ」

兼「夫れに葦原さんは、最う二年から磨利子さんを思て在つしやるのですつて」

磨「まア、那樣に前から……」

兼「夫れでね、何時も岸田さんや美知子さんの所へ行つては貴女のお噂を聞いては
喜んで在しやるのよ」

加「去年磨利子さんが、病氣でバヌエールの温泉に行く前に、貴女が三月許り寝て
居た事があつたでしやう、あの時に、名前を告はないで、毎日貴女の容體を心配
して尋ねに來た男があつたでしやう」

磨「え、妾知て居てよ」

加「あの男が、矢張葦原さ」

磨「本統に床しいお心の方ねえ。……葦原さん」

磨利子は増男を呼んだ、増男は莞爾々々して磨利子に近いて來た。

兼「磨利子さん、何か御用ですか」

磨「今、此處で皆さんがお話しなすつたこと、貴下御存知？ 皆さんがねえ、お話しして下さつたのよ、妾が病氣で寝て居ました時に、貴下、毎日の様に私を尋ねて下さつたのですつてねえ」

萃「え、夫れは本統の事です」

磨「本統に、口では御禮の申し様もありませんわ、……安孫子さん、聞えましたか、……貴下は妾に今まで何を仕て下さつて？」

男爵「だが、僕を貴女と知合に成てから、未だ幸と一年にしかならないのだからね」

磨「でも、此の方が、今お目に掛つた許りぢやありませんか、夫れでも、未だ御知合にならぬ中から、御親切があるんですもの、……本統に貴下はお可笑な事許り被仰るのねえ」

恰度其處へ波子と下男が食卓の用意をして持て来た、

萃「あゝ、御馳走が出来ましたのねえ、妾大相お腹が減たわ」

男爵「では、僕は失敬しやう、磨利子さん、左様なら」

磨「左様なら、今度は何時入来しやるの」

男爵「貴女の可いと云ふ時に来やう」

安孫子男爵は悄然として出て行つた、女に惚れる男は何時も慫うである。

「四」 唯だ兩個で

ダンスにも堪えぬ……増男意中を語る……外の方と結婚なさい

安孫子男爵の出て行つた後を見送つて、裁縫屋のお兼は磨利子に向ひ、

兼「磨利子なん、本統に貴女は安孫子さんには手酷しいのねえ」

磨「本統に妾クサクして了ふのよ、だつて、あの方は年中入り浸つてるんだもの、すると、先刻から磨利子の様子を見て居た織江と郷田が傍から口を出す、

織「貴女はお嫌でしやうけれど、磨利子さん、妾なら、那樣にされて見度いわ」

那「ハ、ハ、お前は中々面白い事を言ふねえ」

「何です、お前なんて言はないで下さい」

磨「さア、皆さん、御一緒に食つて下さいまし、喧嘩なんか仕つこなしよ、喧嘩しても、直に又仲直りを仕なさやならないんでしやう」

機「だつて磨利子さん、此の人、妾の誕生日に何を呉れたか御存知？ 本統に酷い人よ」

磨「もう〜那樣ことを言はないで、さア草原さん、妾の健康を祝して下さいましね」

増「宜しい、健康を祝しましやう」

此處で一同盃を上げて磨利子の健康を祝する、

衆「さア〜、何人が踊りませんか」

加「ちや仕方がない、僕から唄ふとしやう」

加藤が一頻り唄を歌ふと、今度は一同で舞踏を初める、

磨利子は、餘り氣分が優れないけれど、皆のものが、面白相に踊るので、自分もツイ踊って見たくなつて、少し許りダスンを試つて見たが、忽ち倒れるやうに椅子に凭れる。

夫を見て居た郷田は、

郷「磨利子さん、何うしたのです」

磨「イエ、鳥渡と息切れが仕たものですから、………イエ、もう何ともないのよ」
草原は靜に磨利子の傍に寄つて来て、

増「何うなすつたのです、苦しいのですか」

磨「否え、何ともありませんわ、さアおやりなさい」

郷「さア、やらう」

磨利子は又もや踊り出した、けれども、再び止めて了つた。
夫を見たお兼は、

妻「磨利子さん、御氣分が悪いの」

磨「水を一杯頂戴な」

兼「何んな氣持なの」

磨「否え、平素の通りよ、何んともないわ、……………ねえお兼さん、次の間で煙草で

も食つて頂戴、妾すぐ行くから……………」

兼「皆さん、彼方へ参りまじやう、磨利子さんを少し落着して進た方が可いわ」

磨「え、妾、すぐ行つてよ」

お兼は人々に向ひ、少し踊れば、すぐあれだから困ると云ふ、葦原増男も眉を顰めて、あゝ可愛相だと長嘆する、一同も何だか興味を削れた様子で連れ立つて次の部屋へと行く。

* * * * *

磨利子はストーヴの上の鏡を静と見て居たが、

磨「まア、妾の顔は蒼白だわ……………、あゝ、息苦しい」

兩の手で額を抑えたまゝ、悲しげに倦いて居ると、其處へ入て來たのは葦原増男である。

増「何うですか、磨利子さん」

磨「あゝ、貴下で在つしやいましたか、……………有難う御座います、最う何時もの事で御座いますから、慣れて居りますのよ」

増「本統にお氣をお付けなさいよ、僕、貴女の友人になつて、貴女に恁んな不攝生な事をさせない様にします」

磨「那樣ことを言ても駄目よ、さア、彼方へ参りまじやう、——あら、何うなすつたのよ」

増「僕の見るところや、貴女の健康は何うも氣にかゝる」

磨「本統に貴下は御親切ねえ、……外の人達も妾の事を心配して在つしやるでしやうから、行きまじやう」

増「けれども、外の方は私程貴女の事を思て居やアしません」

磨「そりや、本統ですわ、……あ、爾う、爾う、妾、全然いつかの御親切な事を忘れて居ましたわ」

増「貴女を思つてるとか、思はないとか、那樣お話を仕て居るのを、貴女は定めしお笑ひでしやうな、磨利子さん」

磨「否え、妾、那樣ことは毎日の様に聞いて居ますから、毫もお可笑いなど、は思ひませんわ」

増「ね、磨利子さん、僕に約束して呉れませんか、……用心して是迄の様な亂暴な生活を仕ないと云ふ事を」

磨「用心すると言つても、那樣ことは出来ませんわ」

増「何故出来ないのです」

磨「けれども用心して生活して居れば、妾の體は保ないでしやう、身體を大切にしたり暮すと云ふ様な事は、お友達や家族の方々と御一緒に在しやる世間の奥さん方なら出来るでしやうけれど、妾の様なものには、迎も出来ませんわ、……ねえ、葦原さん、妾達は他人の慰ものになつたり、虚榮心の道具に使はれたりして居るから慙うやつて居られるのですけれど、若し夫れが出来なくなれば、世間から棄てられて了ふのよ、ですから、夜更しもすれば、朝寝も仕ますわ、……貴下御存知でしやう、ソラ、曾か妾が二月も病氣で寝た事があつたでしやう、あの時なぞも、ものゝ半月も経てば、誰一人妾を尋ねて呉れるものもないのですからね」

増「爾うです、夫れはよく解て居ます、……ねえ、磨利子さん、僕は貴女に取つては何でもない者でしやう、けれども、若し貴女が許して下さるならば、僕は貴女の兄弟の様に成て貴女の世話を仕て進度いのです、……傍を離れずに、静と

貴女の傍に付いて居て、貴女を以前の様に健康に仕て進度いと思ひます、爾うしたら貴女は、今よりもつと、美しくもなり、幸福にもなるでしやう」

磨「まア、貴下、那樣ことを眞面目で言て在つしやるの」

増男は磨利子の顔を鳥渡と見つめて、

増「磨利子さん、貴女は情と云ふ事を知らないんですねえ」

磨「ハイ、妾は迂かり人に心を許した事がありません、人に心を許せば、妾の身の破滅ですもの」

増「ですから貴女は情がないのでしやう」

磨「何うですか、夫れは判りません、何故那樣ことをお聞きになるのです」

増「妾の言ふ事をお笑ひにならなければ、貴女にも情合と云ふ事が解るのでしやうけれど……」

磨「貴下、本統に眞面目で言て在しやるのですか」

増「眞面目ですとも……」

磨「お兼さんの言つた通り、本統、貴下は御親切な方だわねえ」

増「貴女は僕の事を笑て居るのでしやう」

磨「否え、本統に貴下の様に被仰て下さる方は一人もありませんわ、……本統に貴下妾のために氣を付けて下さいますの」

増「え、本統に……」

磨「何時も妾の傍に付いて居て下さるの」

増「貴女が五月蠅くお思いなさらない限りは……」

磨「一體、夫れは、單に御親切と云ふ丈なので御座いますか」

増「爾うです、燃える様な心中の同情から、慙う云ふ氣が起つたのです」

磨「一體何時からで御座います」

増「もう二年前からです、……或日貴女が、崇高い美しい顔をして、僕の家の前

を通り過ぎて行つた事があります、其の日からと云ふものは、僕は、黙ては居るけれど貴女の影身に添ふて居るのです」

増男の頬には、初心らしい羞かしさが仄見えて居た、彼は女の顔を正面に仰き得ず俛首加減になつて話す。

磨「何故、今日まで黙つて在つたの」

増「貴女を知らなかつたからです、磨利子さん」

磨「夫れならば、紹介を求めて御交際して下さればよかつたのすわ、去年も病氣で居た時に、何度も御尋ね下すつたのに、何うして、入て下さらなかつたのです」

増「でも、僕は入る権利がありませんもの」

磨「妾の様なものに、那樣御遠慮が要るものですか」

増「イヤ、爾うは行きません、……殊に僕は、一度貴女のお目に掛れば、最う有頂天になつて了ひはせんかと、夫れ許り恐れて居たのです」

磨「まア、那樣にまで妾を思て居て下すつたのですか」

増「まア、夫れは今日言うのは止しませう、今日言はなければならぬと云ふ譯もないのですから……」

磨「え、何うぞ言はないで置いて下さいまし」

増「けれども、夫は又何う言ふ譯ですか」

磨「夫を伺へば、最う夫れつ限ですもの、——妾が貴下の被仰る事を信じなければ貴下はお怒りになるでしやうし、又妾が、貴下のお言葉を信すれば、貴下は妾の様な、病氣で沈んで許り居て、夫れで一年に十萬法からのお金を費つて了ふ女のお對手にならなければなりませんわ、貴下の様な若い方がそんな無益ない事をなさる必要がありませんわ、夫れは森谷さんの様な、お金のあるお老人には相當して居る事よ、……ねえ、最う那樣お話は止めませう、彼方へ行て冗戯でも言いましやうよ、さ、参りませう、お手を借して下さいませねえ、貴下」

増男飽

増男が飽まで真面目な態度を取て行けば、女は夫れを避けやうとする、夫れも實に無理もない事である、けれども、増男には夫を怒る氣もない、彼れには唯だ磨利子を哀むと云ふ心より外に、何もないのである。

増「貴女が行き度ければ行つしたら可いでしやう、僕は此處に残つて居りますから

磨「何故ですの」

増「僕は貴女が快活そうに仕て話すのを見て居るのは實に辛いのです」

磨「ねえ、増男さん、妾、貴下には是非申上げ度い事がありますの、聞いて下さいま

すか」

増「え、言て御覽なさい」

磨「今迄被仰つた事のが本統ならば、何うぞ最うお手を退て下さいまし、夫れで、唯だお友達と云ふだけで交際いたしましたしやう、夫れ以上は不可せんよ、ねえ、お友達として、互にお話仕たり笑つたりして遊びましたしやう、……けれども妾の値

を買ひ被つては不可せんよ、夫れ程妾は價値のあるものではありませんがね、……ねえ増男さん、良いお心柄の方ですけれど、恁んな妾共の社會へ入るには未だお齡も若いし感情も強くつて在つしやる、……ですから、餘り恁んな社會へは深入をせずと、外の方と御結婚なさいまし、夫れが可う御座いますわ」
増男が情熱を以て對すれば對する程、磨利子の方は夫を避けやうとする、所詮は、恁んな若い世間見すの初心な青年とは結婚する事が出来ないとと思て居るからであらう。

「五」此の花をお取なさい

如「一つを紀念に……一生運愛し
ましやう……妾は長生が出来ぬ

兩個の話して居る所へ扉を開て半身を現はしたのはお兼である。

兼「まア、お二人限、お安くないのねえ」

磨「妾達は物の義理合を話して居るのさ、まア最う少し此處へ置て、下さい、今に

行きますから……」

兼「え、思ひたけお喋べりをなさいよ」

お兼は冗談を言ひながら扉を閉めた。兩個は又もや、向き直て話す。

磨「ですから、妾を愛するなんて事は止て下さるでしやうねえ」

増「ちや僕は、貴女の御忠告に従つて何處かへ行て了ひましやうか」

磨「妾が爾う言つた爲めにですか」

増「爾うです」

一圖に磨利子を思ひつめて居る増男としては、爾う思ふも無理ならぬ事である、けれども、磨利子の方には、夫が又冗戯の様に思はれてならぬ。

磨「今まで那樣ことを被仰つた方は幾人もあつてよ、けれども、誰れも、行つた人はありませんわ」

増「ちや、貴女は那樣人を皆な止めてやつたのですか」

磨「否え、止めなぞしませんわ」

増「では、貴女は今迄誰れも思つた人はないのですな」

○「え、幸に那樣ことはなかつたのですわ」

成程椿姫と言はれ、一流の美人と言はれるだけに、磨利子が輕々に心を男に許さなかつたのは、さもあるべきである、

増「本統ですか、夫れならば、僕は嬉しい」

磨「おや、何故で御座います」

増「イヤ、貴女が、今迄に男を愛した事がないと聞いて、僕は非常に嬉しく思ふのです」

磨「まア、貴下も随分變つた方だわねえ」

増「磨利子さん、僕は貴女の此の窓の下に終夜立ちづめに立つて居た事もあります又貴女の手袋の釦が落ちてたのを拾つて、僕はもう六ヶ月から持て居るのです」

増男が是れ程、情熱的であるにも拘らず、磨利子は夫れに對して充分に報ひる様子はない様である、斯る社會に育ち、かゝる社會の空氣に慣れた婦人としては、是非もない次第であるが、然し憊う云ふ質の婦人の心に、眞から戀の火が燃え上る時があれば、夫れは最う消すにも消されぬ程猛烈なものであらう。

磨「けれども、増男さん、妾は何だか信用出来ませんねえ」

増「爾うです、僕は狂人地味で居ますからね、たんとお笑ひなさい、お笑ひになつた方が良いのです、——では、左様なら……」

増男はフイと立つて行かんとする。

磨「あら増男さん」

増「お呼びでしたか」

磨「貴下、氣を悪くして下つては不可せんよ」

増「氣を悪くする、那樣ことがあつて可いものですか」

磨「では、握手して下さいまし、……何うぞ是からも、お氣の向いた時にお尋ね下さいまし、ねえ、又お話いたしましたしやう」

増「え、過分に思ひます、……けれども僕は夫で満足は出来ぬ」

磨「では貴女の思て在しやる事を、憊う仕度いとか、あゝ仕度いとか被仰て御覽なさい、妾、貴下の思て在しやる通りに仕てよ、……妾だつて、貴下には随分負めがあるんだから、お報ひ仕なければなりませんわ」

増「まア那樣に言はないで下さい、僕は眞面目に話して笑はれるのは嫌だから」

磨「否え、決して最う笑ひませんわ」

増「では、僕の言ふ事に答えてくれますか」

磨「話して御覽なさい」

増「貴女は愛される事を望みませんか」

磨「何人に？」

増「僕に？ 心の底から愛されるのです、一生涯？」

磨「一生涯？」

増「そうです」

磨「若し夫を妾が本統と思つて信用したら、貴下は何と被仰います」

磨「若し爾うならば、實に初心な、優しい心の方だ………」

磨「世間並みな事を被仰るのねえ、………けれども妾は逆も長活は出来ないのですから、妾は忙しく暮さなければなりませんわ、………ねえ増男さん、貴下お一人で在つしやいませよ、貴下が一生涯可愛つてやると被仰つても、妾は那樣に長くは活きられないのよ、貴下が可愛がつて下さる間、逆も活ては居られませんわ」

磨利子の眼には、涙が輝やいて居る様に思はれた。

増「何を言ふのです、磨利子さん」

磨「兎に角、貴下はお優しい方ですわ、貴下の被仰る事には毫も嘘はありません

わ、下は何でも本心で言て在つしやるのだわ、………夫れに對して、夫れだけのこともありましたわ、——さア、此の花をお受け取りなさい」

磨利子は自分の手に持て居た椿の花を取つて夫を増男の手に渡した。

増「是を何う仕やうと云ふのです」

磨「其花を又持て来て下さいまし」

増「何時？」

磨「花の萎んだ時に」

増「何時萎れるでしやう」

磨「外の何の花も一緒に萎れる時に萎れますわ、朝か晩かに………」

増「磨利子さん、有難う御座いました」

磨「では、最う一度、妾を愛して居ると云ふ事を、言て見て下さいまし」

磨「え、本統に愛して居りますとも………では、もう行つしやいませ」

「ええ、歸りましやう」

増男は磨利子の手に軽く接吻して嬉しげに部屋を出て行く、戀を得た青年の誇りと嬉しさが、其の晴々しい眼に輝いて見えた。

増男は多くの男女の客が笑ひさゝめく聲を後に残して磨利子の家を出て行つた。

増男の歸つた後で、磨利子は一人深く考へ込んで居た、何故自分は男を愛する事が出来ないのだらうか、殊更に男を嫌ふ必要が何處にある、……然し、若し妾があの人と戀に陥るならば、妾は長く活られない。

磨利子は自分が肺を悪くして居るのをよく知て居る、鳥渡踊つても、鳥渡歌つても息が切れる、憊んな弱い身をして夜ふかしを仕て、お酒を飲んで、多くの遊冶郎と一緒にがや／＼と騒ぎながら何時まで命が続くであらう。

あゝ何れは長からぬ命である、……と思ふにつけても、増男の優しい言葉が、今は沁々と胸に應える。

廊下を隔て、遙かに人々の歌ふ聲が聞える、夫れを聞きながら磨利子は寂しげに思ひに沈んで居た。

「六」互に思はれつ

公爵よりの二千法……田舎行き
の計畫……唯つた八日だのに

磨利子は自分の言ふ通り會て一度も眞實男を思つた事などはなかつた、けれども一度葦原増男に遇つてからと云ふものは、何うしたものか、増男の事許り氣に成つて少しも落着いて居られない位である。

磨利子は森谷公爵から金を貰つて増男と一緒に田舎へ保養に行かうと迄思つて居る今しも鏡臺に向て、自分の髪を撫付けて居ると、其處へ入て來たのは、例のお象である。

「あゝお象さん、お前さん公爵に遇て來て呉れましたか」

兼「え、お目に掛けて参りました」

磨「あれを渡して呉れて？」

お兼は懐から紙幣の束を出して磨利子に渡した、夫れは今森谷公爵から受取て来た許りの金である。

兼「磨利子さん、此の中から三四百法借して貰へないでしやうか」

磨「え、其の中から取て行つしやい、夫れからお前さん、私が田舎へ行かうとしたりる事を、公爵に言て呉れて」

兼「え、申上げましたわ」

磨「何と言つて？」

兼「そりや身置のために至極良からうと被仰いましたわ、……………本統に磨利さん、貴女行つしやる氣なの」
磨「え、爾う思て居るの、今日家を見て来たのよ」

兼「お金は幾干あつて……………」

○「二千法」

兼「夫れなら、好いた人と面白い目も出来るわねえ」

磨「全く妾の酔興よ」

兼「昨日も入來して？」

磨「何故よ」

兼「今夜も入來やるの」

磨「妾待て居るのよ」

兼「今日もさ、妾の所へ來て三四時間も在つしたわ」

磨「何か妾の事を話して在つして？」

兼「否え、何も被仰らなかつたわ」

磨「でも、何か被仰つたでしやう」

兼「お金は幾干あつて……………」

○「二千法」

兼「夫れなら、好いた人と面白い目も出来るわねえ」

磨「全く妾の酔興よ」

兼「昨日も入來して？」

磨「何故よ」

兼「今夜も入來やるの」

磨「妾待て居るのよ」

兼「今日もさ、妾の所へ來て三四時間も在つしたわ」

磨「何か妾の事を話して在つして？」

兼「否え、何も被仰らなかつたわ」

磨「でも、何か被仰つたでしやう」

兼「え、唯だ貴女が戀しくつて仕方がないと云つて在つしたわ」

磨「お兼さん、お前さんあの方と長い間、戀意にして居るの」

兼「え、最う随分長くなるわ」

磨「其の間にお前さんあの方が誰れかと惚れ合つた様な話を聞かなくつて？」

兼「いゝえ」

磨「本統なの」

兼「本統よ、眞面目で言つてるのだわ」

磨「本統に氣心の好い方ねえ、親しげにお自分の阿母さんや、お妹さんの事をよくお話しなさるわ」

兼「けれども、恁んな良い方にはお金がないしねえ……」

磨「だけど、其の代り恁んな方は、大丈夫よ、間違がないから」

恁う言ひながら、磨利子はお兼の手を取て自分の胸に當てさして見る、

磨「胸を壓へて御覽なさい」

兼「大變動悸が仕てるのねえ、何う仕たの」

磨「最う十時ねえ、入來やると思ふと、恁んなに動悸が打つ」

兼「では、妾もうお暇しましやうよ」

磨利子は部屋の中から小間使の波子に向ひ、

磨「波ちやん、玄關の鈴が鳴た様よ、早く行て見て來て頂戴」

波子が玄關の方へ行つた後でお兼は磨利子に向ひ、

兼「磨利子さん、妾貴女のためにお祈禱を頼みに行かうかと思つてるの」

磨「何故よ、何うしてよ」

兼「でも、お前さん餘り葦原さんに熱くなり過てるから、體が心配で……」

磨「爾うねえ」

爾う言て居る所へ廊下の方をコト／＼と靴の足音がした、夫れは來べき約束のあつ

た増男である。

増男はツか〜と磨利子の前まで進み寄つて、堅く握手した、

増「磨利子さん！」

磨「妾、玄關の鈴が鳴たから、必と貴下だと思つて居たら、矢張爾うだつたわねえ」

増男は傍に居るお兼などは眼にも入らない様子なので、お兼は、

兼「まア、本統に呆れたわねえ、貴下御挨拶も扱なのねえ……」

増「や！ 是れは失禮、何うです、其後は……」

兼「え、有難う、妾失禮しますわ、妾にも待て居る人があるから……」

お兼は兩個を殘して出て行つて了つた。

兩個は初めて向き直つて。

磨「まア、お掛けなさい」

増男は言れる儘に腰をかけた、

増「で、何うしたと云ふの」

磨「ねえ、貴下、貴下、妾を何時も恣んなに愛して下さるの……」

増「否え……」

磨「では、愛して下さらないの」

増「イヤ、今よりも千倍も可愛がります」

磨「今日は何を仕て在つしたの」

増「僕はお兼さんや、岸田君や、美知子さんの所を尋ねて居たの、そして諸方で磨利子さんの事許り聞いて歩いて居たのさ」

磨「で、今晚は、何を仕て在つしたの」

増「今夜は阿爺が来いと言つて手紙を寄越しましたが、僕は用事があるからと言つた謝絶つてやつた」

磨「那樣ことを言つて阿父さんを怒らしては不可せんよ」

増「那樣ことを心配しなくとも可いよ、磨利子さん、……夫から貴女は何をして居たの」

磨「妾、——妾、貴下の事許り考へて居たの」

増「本統？」

磨「え、本統よ、妾、良い事を考へ出したのよ」

増「本統の事？」

磨「え、本統ですとも……」

増「では、話して御覽」

磨「貴下は、未だ本統に妾を可愛がつて下さるんですもの、……妾計畫が充分に熟したら其の時にお話してよ、そして、貴下と御一緒にやりましよう」

増「僕と一緒にやる」

磨「え、妾の、心から思て居る貴下と御一緒に……」

増「一體何う云ふ事なの、磨利さん、話して呉れ給へ」

磨「では、言て了ひましようか」

増「一體、何んな計畫なの、言て御覽よ」

磨「では、妾、計畫の結果だけ言て見ましよう」

増「何う云ふ結果？」

磨「此の夏、貴下と一緒に田舎の方へ避暑に行かうと云ふ考へなの、最う妾、用事が無いのだから、貴下と御一緒に田舎で暮し度いと思つて居るわ」

増「何うして那樣な事を考へ出したの、話して御覽」

磨「可いことよ、唯だ貴下は妾が貴下を愛して居る様に貴下も愛して下されば可いのよ」

増「磨利さん、貴女一人で那樣ことを考へ出したの」

磨「え、爾うなの」

増「貴下一人で實行にかゝらうと云ふの」
磨利子は、暫く黙つて居たが、

磨「え、爾うよ」

増男も暫くの間、女の顔を覗めたまゝ黙て居たが、やがて、フイと、

増「ねえ、磨利子さん、貴女マノン、レスコーと云ふ小説を読んで見た事があるかね」

磨「え、あります、夫れが何う仕たの」

増「あのマノンと云ふ女が、何か自分で計畫を立て、或物持から金を取て、夫れを男と兩個で使ふ事が書いてある、磨利さん、貴女はマノンの様な婦人ではないし、僕も亦あの男よりは、立派な性格を持て居る積りだ」

磨「だから、何うだと被仰るよ」

増「イヤ、若し貴女が、マノンの様な事をなさるなら、僕は断じて承知しない」

磨「え、よく判りました、ですが最う此の事に就てはお話するのは止めまじやう、……本統に今夜はよく晴れた、美しいお天氣ですわえ」

増「本統に良い晩だ」

磨「シヤンゼリゼーは定めし多數の人出がある事でしょうね」

増「随分出て居る事だらう」

磨「月が高く登る頃まで、人が出盛つて居るでしょうねえ」

増「月のお話しなどは何うでも可いぢやないか」

磨「では、何をお話したら可いのでしやう、妾が貴下を思て居る事をお話しすればイヤなお顔をなさるんですもの、……だから止むを得ずお月さんのお話をしたのよ」

増男の額には憂の雲が、チラと見えた様である、彼れは磨利子が先刻話した事に就て甚く氣を痛めて居る様に思はれる。

増「ねえ、磨利さん、僕は少し心配になつたのだよ、……………先刻貴女が言つた事ねえ……………」

磨「又話が後へ戻るのですか」

増「戻らなきやならないさ、ねえ、貴女の言て呉れた事は、そりや僕に取て實に嬉しい事だけれど、其の計畫實行に就ての秘密を言て貰はなくちや……………」

磨「可いちやありませんか、貴下が妾を愛して下さるなら、此のイヤな巴里を避けて二三ヶ月の間、妾と一緒に暮して下されば夫れで可いんですよ、貴下を愛するにしてもお金がなければ、困るわ、……………貴下妾と森谷公爵の事を嫉妬ちや厭よ、あの人と妾の間、色戀の關係ぢやないのですからね」

増「でも……………」

磨「妾は貴下を愛して居るんですよ、……………最う言はなくつても可いわ」
増「然し……………」

磨「最う判つてるぢやありませんか」

増「イヤ少し判らない所があるから……………」

磨「では、明日その事に就てお話しいたしましやう」

増「え、ちや明日お話しやう、然し最う僕を追ひ歸すのかね」

磨「イエ、最う少し位居て下つても可いわ」

増「最う少し位、ちや……………長く居ては悪いのだね、誰れか来るんだね」

磨「又、那樣ことを被仰るんですか」

増「磨利さん、貴女は僕を欺す積りなんですわ」

磨「増男さん、貴下と御懇意に成つて、今日で何日ですの」

増「八日です」

磨「夫れだのに、妾の方から毎日呼び出しを掛けて居るぢやありませんか、夫れは何う云ふ譯か御存知ですか」

増「いゝえ知りません」

磨「妾が貴下を愛して居なければ、安孫子さんの様に門前拂を喰しますわ」

増「成程な……」

磨「だから、貴下は黙て可愛がられて在つしやれば可いのよ、心配しないで……」

増「イヤ、失敬しました、ちや、僕は歸るとしやうか」

磨「では、明日の正十二時に遇ひまじやう」

増男は恚う言つて歸りかけたが、然し、何うも先刻の言葉が氣に成て仕方がない、

増「ねえ、磨利子さん、僕に誓て下さらんか」

磨「何をですの」

増「貴女が誰れも外の男を待て居るのぢやないと云ふ事を」

磨利子は艶かに笑つて、

磨「まあ、貴下未だ那樣ことを言て在しやるの、大丈夫よ」

磨 夫なら僕も嬉しい、では左様なら」

増 左様なら……」

増男は爾う言て出て行つて了つた。

磨利子は後を見送つて、恍然として夢見るが如き心地であつた、考へて見れば、増男さんに逢てから今日までに、未だ辛と八日より經ぬ、夫れなのに、最う妾の心はあの人に奪はれて居る、何うして恚んなに成つたのだらう、恚んなに成らうとは吾れながら夢の様だわ……、今迄に妾は人と云ふものを愛した例がない、夫れだのにあの人に遇ふと、最う恚んなに狂氣の様に成て了つた。

けれどもあの方は、今迄に誰も愛した事のない妾が、是程迄に思つて居ると云ふ事をよく御存知なのだらうか、……あゝ、本統に妾は、何うして恚う力一杯愛する様になつたのだらう、今迄、何の方だつて、妾の心を恚んなにした方はなかつたわ……女の方から恚んなに深く思ひ込むのは、悪い前兆かも知れないわ。

磨利子は、獨りて平素の冷靜を失つて居る自分の心を疑ひ、そして何と云ふ譯もなく此の戀の行く末を氣づかつた。

「七」破裂の手紙

伊知地伯爵……一萬五千元の無心……お別れの手紙

夫れから暫くすると小間使の波子が伊知地伯爵と云ふ男を連れて入て來た、此の男も外のものと同じ様に、磨利子に對して思召しのある一人である。

「伯爵がお出になりましたわ」

磨「よく在つしやいました」

伯爵は磨利子の傍に近寄て來て、

伯爵「何うだな、磨利さん、少しは可い方かね」

磨「え、有難う」

伯爵「酷く寒いぢやないか、時に貴女が十一時に來て呉れと云ふ手紙ぢやつたから、

僕はキチンと其の時間にやつて來た譯さ」

磨「急にお話し仕度い事が出來たの」

伯爵「爾うか、時に最う食事を仕たかね」

磨「いゝえ、……何故なの」

伯爵「未だならば、互に食へながら話を仕やうぢやないか」

磨「貴下那樣にお腹が減いて」

伯爵「實は今日俱樂部へ行て、拙い飯を食つたから」

磨「爾う言へば、此の間織江さんと此處で一緒に食事を仕ましたわ」

伯爵「織江さん一人きりと……」

磨「いゝえ、郷田さんも在つしたわ、ソラ、貴下御存知でしやう」

伯爵「ウム、知て居る」

磨「夫れから葦原増男さんも一緒に」

伯爵は小首を傾げて、

伯爵「何、葦原増男？」

磨「え、郷田さんのお友達なのよ、それにあの時は、お兼さんと妾も一緒に食べたわ、そして随分よく笑つたわ」

伯爵「爾うか、知て居れば乃公も来たものを、……時に、此處に誰れか来て居やア仕なかつたか」

磨「い、え、誰れも来はしませんわ」

伯爵「爾うか、恰度乃公が馬車を降る時に、乃公の馬車の傍へ近寄つて来て、見て行つた奴があつたが……」

磨利子は夫れを聞いて、あ、では増男さんだつたかと、爾う思つて、急に氣にかゝつて来たので、呼鈴を鳴らして波子を呼んだ、

夫を見た伯爵は、「何だ、何か用事でもあるのか」と言つて訊く、磨利子は、い、え

一寸用事があるのよと、言ひながら波子を呼んで、小聲で、

磨「ねえ、波ちゃん、お前戸外へ出て、増男さんが又歸て在つしやりはせんか見て来てお呉れ、若し、歸て入来しやる様だつたら、一寸妾に知してお呉れよ」

爾う言て波子を出した後磨利子は伯爵に向ひ、

磨「ねえ、伯爵、少し眞面目な御相談があるのよ」

伯爵「ホウ、眞面目な相談……、何はう」

磨「貴下、お金を持て在して」

伯爵「一體何れ位」

磨「え、一萬五千法許り」

伯爵「ホウ、可なりの額ぢやないか、で、お前は其を何に使はうと云ふのだ」

磨「借金を拂て了ひ度いと思ひますの」

伯爵「一體何れだけ拂はうと云ふのだ」

磨「今のだけ要りますの」

伯爵「何うしても夫れだけ要るのか」

磨「え、夫れだけ要るのです」

恰度其の時に波子が一通の手紙を持って来た、磨利子は不審に思ひながら其の手紙を取つて、

磨「今頃、一體誰れが手紙を越したのだらう、増男さんぢやないかしら」

恚う言ひながら磨利子は封を切て讀み下した。

拜啓、

小生は自分の身も心も捧げたる婦人に、却て騙弄せらるゝは堪え忍ぶ能はざる所に候、

先刻小生が御身の所を出んとする時、伊知地伯爵と出遇ひ申し候、御承知の如く小生は伯爵程の地位も財産も有せざるものに候へば、逆も及びもつかぬ事に御座

候、

何卒今回の事は是にてお忘れ下され度、小生は御身が此の御手紙御受取なされ候

頃は、巴里には居り申さず候、勿々

葦原増男より

波子は磨利子が讀み終つたのを見て「御返事は」と訊く。

磨「いえ、返事を差上なくつとも可いのよ、……あゝ、最う今迄の事は全然夢だわ」

波子が出て行つた、伯爵は磨利子が、手紙を握つた儘、悲しげに吐息をして居るのを見て不審に思ひ、

伯爵「一體、其の手紙は何うしたのだ」

磨「此の手紙は貴下に取つては、面白いものよ」

伯爵「何うしてね」

磨「だつて、貴下は此の手紙の御蔭で一萬五千法だけ得をなすつたんですもの」

伯爵「本統か、手紙で金を儲けたなどは、今迄に例がない」

磨「それで、最う貴下に御願ひしたお金は要ないのよ」

伯爵「ウン、では、金貸しが證文を返して来たと言ふ譯か、夫れはよかつた……」

磨「いえ、爾うちやないよ、妾、ある人に惚れて居たの」

伯爵「え！ お前が？」

磨「え、私が……」

伯爵「一體誰れに……」

磨「妾を思つて呉れない人に、……財産もない貧乏な人……」

伯爵「ウン、夫れで我輩がお前の情夫のために、金をせしめられやうと仕た譯か」

○「爾うなの、さ、此の手紙を御覽なさい……」

磨利子は、彼の増男より送て来た手紙を取て伯爵の面前に突つけた、

伯爵は暫くの間夫れを讀で居たが、

伯爵「成程な、葦原増男さんとやら、大分妬いて居るな、成程これで手形が必要ぢや

た譯だな」

磨「ね、貴下、奢つて下さるでしやうね」

伯爵「奢るとも、大に奢るよ、だが、お前も一萬五千法は食へまい」

磨「では、一緒に出かけまじやう」

伯爵「だが、大層顔の色が悪いねえ」

磨「いえ、何ともないのよ、波ちゃん、帽子とショールを取て頂戴」

兩個は相携へて戶外に出て行く、後見送つて小間遣の波子は稍暫し不審の面持であつたが、卓の上に乗てあつた手紙を拾つて讀んで見た

波「何うも變だ、變だと思て居たら、増男さんが恁んな事を書いて來て居るんだもの、……でもあの人も餘り氣が早いねえ、未で出來て八日になつた許りなのに……」

爾う言て居る所へ入て來たのはお兼である、

波「あ、お兼さん、よく來つしやいました」

兼「磨利さんはお出かけ？」

波「今出て行つしたのよ」

兼「何處へ？」

波「伊知地伯と一緒に御飯を食へに」

兼「爾う、……其の手紙一體何處から來たの？」

波「増男さんの所から……」

兼「磨利さんは何か言て居て？」

波「い、え、何も言て居らつしやいません」

兼「ちきに歸ていらつしやるか知らん」

波「必と遅いでしやう」

恰度爾う言て兩個の話して居る所へ下僕が磨利子の毛皮の上着を取りに來た、

兼「磨利さん、未だ階下に在しやるの」

下「ハイ、馬車の中に……」

兼「ちや言て來て頂戴、妾が急に用事があつてお話し度い事があると云て居ると、

……ねえ、爾う言て來て下さい」

下「でも、お一人ぢやないのです」

兼「可いからさ、お前さんは爾う言て來て呉れ、ば可いのだよ」

恰度此の時、窓の外からお兼さん、お兼さんと呼ぶ聲がする、

お兼は窓を開けて、

兼「まア、本統に急促の人ねえ、……今に磨利さんが來ますよ」

爾う言てお兼の答えた人は、葦原増男である、増男は先刻の事を最う後悔してお兼に取なしを頼で居るのである。

「八」 眞實の男を見た

再び増男と會見……磨利子
心中を明す……田舎行きを決心

磨利子さんは是非ともお目に掛り度いとお兼が言ふので、磨利子は何事かと思つて急いで上つて來た。

磨「お兼さん、何か御用なの」

兼「増男さんが妾の所に居らつしやるのよ」

磨「夫れが何うしたと云ふの」

兼「あの方、貴女に遇ひ度がつて居るのよ」

磨「那樣こと言つても、妾あの方に遇て居られないわ、階下に待て居る人があるんですもの」

兼「でも妾は遇つた方が可いと思ふのよ、あの様子ぢや、或としたら伯爵に喧嘩を仕かけるかも知れないわ」

磨「けれども、一體あの方妾を何う仕やうと云ふのよ」

兼「夫は何うなさるつもりか、妾にだつて判りませんわ、唯だあの方が戀に眼の眩んで在つしやると云ふ事だけは事實だわ」

其時小間遣の波子は毛皮の上着を持って後に立つた、

波「御着せ申しませうか」

磨「いえ、一寸待てお呉れよ」

お兼は、かの増男を下に待してあるのだから、氣が氣でない、

兼「磨利子さん、貴女夫れで、一體何う仕やうと云ふのですか」

磨「爾うね、遇へば、又兩個の不幸の種ぢやないのでしやうか」

兼「ぢや、増男さんに遇はなけりや可いちやないの、……此の儘に打棄つて置きなさい」

磨「お兼さんは何う思つて……」



兼「選はない事にしたら可いぢやないの」

磨「でも、何か言て在つして……」

兼「夫れ御覽なさい、矢張遇い度いのでしやう、……けれども伯爵は何うなすつたの」

磨「待て居てよ」

兼「返して了つた方が可かなくつて……」

磨「爾うねえ、……波ちやん、階下に行つて伯爵に爾う言て来て頂戴……あの、磨利子は大層氣持が悪い様ですから、御一緒によう参りませんと……」

波子が階下に行くのを見送つて彼のお兼は窓の外に向ひ増男さん、増男さんと呼んだ、

磨「ねえ、お兼さん、あの方の來つしやるまで、お前さん此處に居て下さいよ」

兼「けれども、増男さんが來らしやると最う妾は邪魔にされるんでしやう、妾、好

い加減にして歸りますわ」

恰度其の時波子が上つて來て、伯爵が歸て行つたと云ふ事を告げて行つた。

磨「あの方、何も被仰らなくつて？」

波「けれども、大變に怒つて在つした様に見えましたわ」

怒う言て居る所へ増男が再び入て來たので、波子とお兼は兩個を残して去つて了つた。

増男は極り悪る相に磨利子の傍に進み寄つた、

増「磨利子さん」

磨「何か御用で在しやいますか」

増「僕が悪かつた、赦してくれ給へ」

磨「いゝえ、赦されません、……夫れは妬くのは可う御座います、けれども、あんな皮肉な手紙を越すなんて、餘り酷いわ、貴下は、妾を那樣に苦しめて、感しいのですか」

増「磨利さん、貴女も、僕を随分苦めて居るぢやないか」

磨「けれども、夫れは何も妾の心から仕た事ぢやないんですもの」

増「僕は伯爵が來たのを見た時、あの男の爲めに追拂はれたのだと思つて、僕は夢中になつちやつたのさ、そして實は彼様手紙を書いた様な次第さ、……で、僕は貴女があの手紙に對して何か返事を呉れるだらうと思つて居た所が「宜しう御座います」と云ふのでこれなり最う遇れないのかと思つて實は當惑した様な次第さ、……ねえ磨利さん、貴女と知り合になつたのは未だ辛と八日許りだけれど、僕が二年以來貴女を思つて居ると云ふ事を忘れないで下さい」

磨「でも、貴下はよく御決心が付いたのねえ」

増「何を？」

磨「何をと言つたつて、貴下巴里に居ないと被仰つたのぢやなくつて……」

増「那樣ことは逆も出來ないよ、僕は」

磨「でも、爾うなさらなくちや駄目よ」

増「それは又何故」

磨「妾の境遇が、貴下と戀中で居る事を許さないのですわ、何しても駄目なのよ」

増「でも、兎に角僕を愛して居るのだらうね」

磨「え、夫りや愛して居ますとも……」

増「今も？」

磨「今は妾考へたのよ、逆も妾の望は叶はないと云ふ事を……」

増「けれども、夫れ程僕を思つて居て呉れるものなら、何も伊知地伯爵を今夜呼び入れなくとも可さそうなものぢやないか」

増「何を？」

磨「何をと言つたつて、貴下巴里に居ないと被仰つたのぢやなくつて……」

増「那樣ことは逆も出來ないよ、僕は」

磨「でも、爾うなさらなくちや駄目よ」

増「それは又何故」

磨「妾の境遇が、貴下と戀中で居る事を許さないのですわ、何しても駄目なのよ」

増「でも、兎に角僕を愛して居るのだらうね」

磨「え、夫りや愛して居ますとも……」

増「今も？」

磨「今は妾考へたのよ、逆も妾の望は叶はないと云ふ事を……」

増「けれども、夫れ程僕を思つて居て呉れるものなら、何も伊知地伯爵を今夜呼び入れなくとも可さそうなものぢやないか」

磨「ですから、是れ以上言ふのを止しませう、ねえ、貴下は若くつて、容子がよくつて、氣立てが優しくつて在つしやるし、妾も亦良い女ですわ、ですから貴下は妾の良い所を取て、悪い所は棄て、下さいね、外の事には關りつこなしに仕ませう」

増「けれども、貴女は此の巴里を去つて、何處かかけ離れた所で、僕と唯だ兩個で暮さうと言つたぢやないか、僕は其の希望が實現されるのが厭なのさ、つまり夫れまでにする手段が嫌なのさ」

磨「全く夫れは爾うなの、……けれども妾、貴下に言つたでしやう、妾少し保養をし度いとねえ、出来る事なら御一緒に此の夏の間を何處かの田舎の方で暮したら、必と妾の體に良いだらうと思ひましてね、——夫れで三四ヶ月後に巴里に歸らうと思つて居ましたの、けれども、貴下は本統にお上品なお方なのねえ、少とも卑しい考をお持なさらないのねえ、——あゝ最う何も言ひますまいよ、ねえ貴下、

懲うやつてお交際をして頂くのは、未だやつと八日ですわねえ、今の中に別れませう、貴下御名刺に寶石か何かへ添へて紀念として妾に下さいまし、夫れでお別れしませう」

増「磨利さん、何を言て居るのだ、何しろ、那樣無理をして僕と一緒に田舎に行く事は餘り良い事ぢやないよ、……だが、兎に角貴女は僕に取つては、かけかへのない大事な人だ、僕の希望も生命も皆な貴女の身一つにかゝつて居るのだ、……要り僕は貴女を唯だ愛して居るのだ、是れ以上、言ひ様がないよ」

磨利子は是れ程言はれても、未だ自分の心持が男の方に充分徹らないのが焦慮かつた、

磨「貴下の被仰る事、御尤ですわ、……けれども、最うお目に掛るのは止しませう」

増「ぢや磨利さん、貴女は僕を愛しては呉れないんだね」

「何を言て被仰やるの……」

増「だつて不明んぢやないか」

磨「話せと被仰れば御話しますわ、妾、變つた暮をして見度いとツクムと思て居るのよ、妾、恁んな騒々しい暮しを仕て居ますけれど、決して面白くも何ともないのですわ、本統に息の塞る様な思を仕て居るのですわ、……そりやわい／＼言て呉れるものもありますわ、けれども夫れは人に見せつける虚榮心から那樣な言て呉れるだけなのよ、妾は那樣な人達の自惚の材料にはなるけれど、假りにも尊敬される様な事はないのよ、……夫れは妾にだつて友達はありませんわ、けれども、皆んなお兼さんの様な人達許り、自分の得になる中は來るけれど、爾うでなければ、寄り付ない人たちよ、……ですから、妾の周圍にはつまらん者許り居るのよ、妾、或時爾う思た事があるのよ、本統に心から妾を可愛がつて下さる人に出遇て見度いと……、するとあの森谷公爵にお目に掛る事が出來たのですわ、

けれども、あの方は最うお老人ですわ、唯だ妾を娘分として可愛つて下さるだけな

の、妾の心の中は、あの方では満足出來ないのよ、……すると妾、貴下にお目

に掛る事が出來たでしやう、本統に貴下はお若くつて、情愛が深くて在しやるわ

貴下は、妾のために涙を流して下さつた事もあるわ、わざわざ妾の病氣を尋ねて

下さつた時も、名前も被仰らないでお歸りなすつたわ、初心で情が深くつて在し

やる貴下に遇て、妾初めて本統の「男」と云ふものを見たのですの、……妾、

貴下が在るので、華やかな未來を思ふ事が出來る様になつたのですわ、……そ

れで妾、急に田舎へ行く事を思ひ立つたの、そして妾、小兒の事を思ひ出し

たのよ、小兒の時の様に、楽しく田舎で暮し度いと思つたの、……けれども、

駄目だわねえ、……貴下妾の心持が判つたでしやう」

夫を聞いて居る中、熱心な顔色をして眼を輝かして居た増男は、

増「磨利さん、貴女、其の希望が届かないものと思て居るの、幸福を避けやうとす

れば、幸福は逃げて行つて了ふ、ねえ、磨利さん、もう何もお言ひでないよ、僕等は僕等の思ひ通りに決行しやうぢやないか」

磨「最う止して下さいまし、増男さん、甚く心を騒せて、妾病氣が重つて、死んで了ふわ……、ねえ、貴下、妾が何んな身分の女かと云ふ事を考へて、那樣ことは止して下さいまし」

増「イヤ、僕に取つては、貴女は立派な大切な人だ、僕は心底から愛して居る」

恰度爾う言て居る所へ波子が伊知地伯爵の手紙を持て來た、けれども、最う磨利子は、伯爵などには用事はない、

磨「波ちゃん、伯爵のお使ひに爾う言てお呉れ、……御返事は御座いませんで……」

「九」 老公爵の憤り

田舎の別荘……密の機な二人の仲……金の道が杜絶えた

磨利子は本統に不幸な女であつた、父には早く死に別れ、十二年前に母にも別れて齡の行かない身で、浮氣な人達の間に交つて今日まで暮して來たであるから、本統に心から人に愛された事は今迄になかつたのである、初めて葦原増男に是れ程思はれて、夢中になるのも無理ならん事である、

磨利子は前に一疋の犬を飼つて居た、此の犬が磨利子の苦し相に咳をするのを、氣の毒さうな眼をして見て居る事が始終あつた、磨利子は犬から受ける同情をすら喜んだのである、けれども其の可愛がつて居た犬も死で了つた、其の時磨利子は、母に別れた時程甚く悲嘆にくれたのである。

其の後磨利子は本統に眞身な同情者と云ふものに遇はなかつた、騒々として居る自分の周圍には、絶えず多數の人は來て居るが、誰れ一人として自分の心からの友達と云ふ程のものはなかつた。

寂しい寢臺の上に、冷やかな夢が覺めて、頻りに苦し相な咳が出る時などは、悲し

さと、寂しさとで、泣いても泣き切れない様な氣持のする事も度々あつた。夫れが今増男と云ふ唯一の友を得たのである、イヤ友と云ふよりも以上の關係のある人を得たのである、全く夢中になるのは尤もの事である。長々と話し終つた兩個は、漸く今になつて互に心が融け合つた、話に疲れた磨利子は、寢椅子の上に横になつたが、込み上げて来る咳を手巾で壓へて、

「ねえ、貴下、いろんな事を言つて濟ませんでしたわねえ、許して下さいませよ」
 憊う言ひながら、最前増男が送て來た手紙を、引裂いて増男に返した。

兩個はこれで愈々田舎へ行く事に話を決めたのである、
 夫から後兩個は馬車に乗つて、巴里の郊外に適當な家を探しに出かけた、
 兩個はよくブーゲバルへ出かけて行つた、此處は左の方にマレーの疎水があつて右には初夏の緑に包まれた連山が、うね／＼と波を描いて居る、兩個は此の邊を散

歩したり、或は舟を浮べたりして、互に美しい愛を語り合したのである。

巴里に居ると、何しろ「椿姫」と綽名のある程の女であるから、道を歩いて居ても多くの知人に出會す、夫れが大抵以前の情夫か或は夫になりかけた人たちであるから増男に取ても不愉快で仕方がない、けれども、愆んな田舎を二人で逍遙るきして居ると、那樣氣分は少しもない、何だか、本統に自分の妻の様に思はれて來る、
 兩個は新婚の花嫁花婿の様に手を取つて、質朴な田舎の人々の間を歩いて行つた。
 小舟を川に浮べて居る間も、話すのは唯だ兩個の燃ゆる様な愛情の言葉許りである妨げる人もない靜かな自然の中に、兩個は夢の様な、恍惚とした氣持で話し合つて居る事も度々であつた。

或日舟を上つて見ると、河岸に小さな二階建の家が見える、

「貸家ぢやないのでしやうか、一寸往て見ましやう」

と磨利子が言ふので、二人は進で家の玄關の所まで行て見た、其處には貸家の札が

出て居る、二人は家を一覽して終に此處を借る事になつた、

家を借るに就ても、磨利子は例の自分を娘分に思て居る森谷公爵から費用を出して貰つた、勿論自分の生活を支へるだけの費用も……。

増男は、今迄の様な華美な、放縦な生活をさせてはならぬと思つて氣をつけては居たが、然し所は變つたけれど、暮し向は前とは少しも變らず、毎日の様に知り合の女がやつて来て遊で行く、

毎日の様に來る女に對して、宴會の様な大騒ぎをして響應をやる事は、毎日の様に續いた、

或日の事、例の森谷老公爵が磨利子の所にやつて來た時などは、食堂には未だ晝飯も食べないで居る女客が十五人も居た。

那樣ことゝは知らずに、ツカ／＼と入て來て食堂の扉を開いて見ると、十五人からの女が居るので老公面喰つて這々の體で引下ると、後ではドツと云ふ自分に對する嘲笑の聲が起つたので、老公爵は一方ならず威嚴を損じて家に歸つた、此の事があつて以來と云ふものは、公爵よりは少しも便りがなかつた、そして磨利子に對する手當金も全く杜絶えて了ふと云ふ始末となつた。

増男の方に取ては、公爵と少しも關係がないと云ふ事は、磨利子を自分の獨占にする事なのだから嬉しいには相違なかつたけれど、磨利子で見ると金の杜絶えた事は一方ならぬ苦痛であつた。

磨利子は終にお兼に頼んで老公爵に遇つて話して貰ふ事にした。

「110」公爵と絶交す

増男と手を切れ………逆も天程長
生は出來ぬ………人間が一變した

お兼は老公爵に遇つて來た、

其の話によると、先日(せんじつ)の食堂(しょくどう)の無禮(むれい)一件(いけん)は許(ゆる)すが然(しか)し葦原(あしはら)増男(ますお)と云(い)ふ青年(せいねん)と公然(おんげん)に夫婦(ふうふ)の様(よう)に暮(くら)して居(ゐ)るのならば今迄(いままで)通りに年(ねん)金(きん)はやれないと言(い)ふ公爵(こうしやく)の話(わなし)である。お兼(かね)は、葦原(あしはら)とは逆(さか)も末始(すまじ)終(はら)は夫婦(ふうふ)になれないのだから、今(いま)の中(うち)に切(き)れて了(しま)つて、森谷(もりや)老公(らうこう)爵(やく)から、従前(じゆぜん)通りに金(かね)を貰(もら)つた方(はう)が可(い)いと言(い)ふ、けれども、磨利子(まりこ)は何(なに)うしても那(そ)様な事(こと)は出(で)来(こ)ないと言(い)ふ。

磨(まり)「今更(いまさら)になつて妾(めかけ)、那(そ)様(さま)こと出(で)来(こ)ないわ、今(いま)では唯(ただ)の一時(いち)間(かん)でも増男(ますお)さんと一緒に居(ゐ)ないでは辛抱(しんぼう)出(で)来(こ)ないんだもの、……夫(お)れに妾(めかけ)も長(なが)い間(かん)公爵(こうしやく)のお世話(せわ)になつて娘分(むすめぶん)にして頂(いた)く程(ほど)長生(ながせい)は出(で)来(こ)ないから、公爵(こうしやく)もお金(かね)を大(たい)切(せつ)になさる方(はう)が可(い)いわ、妾(めかけ)も何(なに)うかするから最(さい)う公爵(こうしやく)には用(よう)がないわ」

お兼(かね)は再(また)び磨利子(まりこ)の使(つか)いで公爵(こうしやく)のもとへ此(こ)の事(こと)を言(い)ひに行(い)つた。

此(こ)の日(ひ)以(い)来(らい)磨利子(まりこ)の様(よう)子は全(ぜん)然(ぜん)以(い)前(ぜん)とは變(かは)つて了(しま)つた、そして増男(ますお)にも以(い)前(ぜん)の磨利子(まりこ)を思(おも)ひ出(だ)させる様(よう)な事(こと)は少(すこ)しも見(み)せな(な)い様(よう)にした。

磨利子(まりこ)の増男(ますお)に盡(つく)す親切(おんせき)と言(い)つたら、夫(お)れは世間(せけん)の妻君(さいくん)が夫(お)れに盡(つく)す以上(いじやう)で、何(なに)な細(こ)かな事(こと)にも氣(き)のつかぬ所(ところ)はなかつた。

磨利子(まりこ)は以(い)前(ぜん)の友(とも)人(じん)とも交際(かうさい)しなくな(な)るし、品行(ひんぎん)は言(い)ふ迄(まで)もない事(こと)、言葉(ことば)もあ(あ)のだらしない調子(てうし)をやめるし、贅澤(ぜいたく)もぶつり止(と)めて、殆(ほとん)ど別(べつ)人(じん)になつた様(よう)であつた。新(あら)しく買(か)い入(い)れた端艇(はなび)を河(か)に泛(うか)べるために、増男(ますお)と二人(ふたり)で出(で)て行(い)く様(よう)子は、四(よ)ヶ月(げつ)以(い)前(ぜん)の磨利子(まりこ)を夢(ゆめ)にも思(おも)ひ出(だ)せぬ様(よう)な質素(しつそ)な服(ふく)装(さう)であつた。

夫(お)れ許(ゆる)りではない、殆(ほとん)ど二(に)月(つき)が間(かん)と云(い)ふものは全(ぜん)く巴里(ぱり)の方(はう)へも行(い)かなかつた、偶(たま)に尋(たず)ねて來(く)る友達(ともだち)と言(い)つては、お兼(かね)と美知子(みちこ)だけであつた。

或(ある)時(とき)は、頭(かぶ)を飾(かざ)る花(はな)の價値(ねだん)だけでも、優(い)に一家(いっか)の生(せい)活(くわく)を立て、行(い)く事(こと)が出(で)來(こ)た程(ほど)の女(おんな)も、今(いま)は質素(しつそ)な生(せい)活(くわく)で満(まん)足(そく)して居(ゐ)る、……磨利子(まりこ)に取(と)つては、世(よ)の中(なか)の有(あ)る榮華(えいご)も、此(こ)の増男(ますお)の愛(あい)に較(くら)べては物(もの)の數程(かずほど)でもなかつた。

恰(ちやうど)度(ど)其(その)時(とき)、森谷(もりや)公爵(こうしやく)から、以(い)前(ぜん)通(つう)りに交際(かうさい)して呉(くれ)、何(なに)の様(よう)な條(じょう)件(けん)でも、喜(よろこ)んで

満足するからと言って来たけれど、磨利子は封も切らずに増男の手に渡した、其の文言の餘りに哀れなので、増男は再び磨利子を公爵に會す様に仕てやらうかとも思つたけれど、然し、自分達の生活の費用を公爵から再び貰ふために、磨利子を會す様に仕たと思はれても残念だと思つて、増男は、其の儘にして置いた。

此の當時は實に磨利子に取つても、増男に取つても、一生涯に又とない程、嬉しい楽しい日であつた。

「一一」 生活上の不安

磨利子の心配……身の周りのものを賣る……増男も同じ考へ

兩個は毎日夢の様な日を過した、

思ひ思はれて一緒になつた兩個に取ては、一日の暮れる事の早さと、一夜の明ける事の短さを知る許りであつた、

兩個は「マノンレスコー」の様な小説を讀んでは、互ひの感じを語り合はしたり、

或時は手を取り合つて森を散歩したり、夜の更るのも知らず音楽を樂しんだりした。

けれども、磨利子は時々、何と云ふ譯もなく泣く事があつた、其の度に、増男は、

「磨利さん、何うして泣くのよ、悲しい事はないぢやないか」

と言へば、磨利子は、自分が、以前素人でなかつたから、後で貴下が私の様なものと一緒になつた事を後悔して、夫れで棄られる様な事がありは仕ないかと、夫れが心配でならないと言ふ、

「那樣ことはないから、安心するが可い、磨利さん」

「では必度見棄てや仕ないからと言って下さいな」

「きつと誓ふ、見棄てやせんから……」

夫れでも尙ほ磨利子は増男の顔を瞞めて、其の眞偽を確めんとする様子である、けれども、愆んな呑氣な日は長くは續かなかつた、又も兩個が互に金の事で心配する様に成て来た。

今日しもお兼が来たのも矢張金に關係した用事であつた。

お兼は部屋に入つて波子に尋ねた、

兼「波ちゃん、磨利子さんは何處へ行つたの」

波「お庭に在つしてよ、美知子さんなぞと御一緒に」

兼「では妾、お庭の方へ行つて見ましやう」

恰度爾う言て居る所へ増男が入て来た、

増「あ、お兼さんか、……實は僕少しお前さんに話し度い事があるんだ、半月程前にお前さん、磨利子の馬車に乗て行つたね」

兼「え、爾うですよ」

増「夫れであれなりお前さんは馬車も馬も持て来ないねえ、——夫れからツイ一週間程前、今日は少し寒いからと言て磨利子がお前に肩掛を着せて歸したが、あれも夫れつ限返つて来ないねえ、——夫から昨日は、少し手入をするのだと言て、

腕環とダイヤモンドをお前さんに渡した様だが、本統に夫れは磨利子の言ふ通りに作り變るのですか、——一體馬や馬車は何處にあるのですか夫れから肩掛とダイヤモンドは何う仕たのです」

兼「ちや、妾、疑はれないたにお話しますわ」

増「何うぞ話して呉れ給へ」

兼「馬は馬喰の方へ返して了ひました、着物は賣りました、ダイヤモンドと腕環は質に入れました」

増「何うして夫を僕に話して呉れなかつたのです」

兼「磨利子さんが内證に仕て呉れと被仰たからです」

増「一體何うして賣拂つたり、質に入れたり仕たのです」

兼「夫れは皆なお拂ひにお金が要るからですわ、ねえ増男さん、幾ら都を離れた田舎へ入つて、好いた同志で暮して居ると言つても、食べずには居られませんわ、

……ですから、貴下には内證で恣んな無理算断を仕て在しやるのよ」

増「成程、實がある！」

兼「え、それは、本統に實があり過るのですわ、夫れに磨利子さんは、是れ許りでなく、皆な賣拂つて了つて借金を拂はうと言って在しやるのよ、……妾に賣拂ふ物の、品書を書いてお送りなすつた程よ」

増「一體借金は何れ位あるのだらう、ねえお兼さん」

兼「まア、尠くとも三萬法はありますわ」

増「ではお前さん、借金取に十四日間だけ猶豫仕て貰つてお呉れ、爾うすれば僕が金策して来て、全然拂て了ふ」

兼「では、貴下借金をなさる積り」

磨「爾うだ」

兼「夫れは爾うなされば結構ですわ、けれども、那樣ことを仕て阿父さんの御械嫌

を悪くすれば、先で御困りでしやう……」

増「イヤ僕も、恣うなるだらうと云ふ心配があつたから、母から譲受けた財産を賣り拂て了ふ様に、公證人に頼で置いた、多分今日位は返事があるだらうと思て居る、爾うなれば、僕は巴里へ行って来て、チャンと手續を仕て來る積りだ、……夫れまでお兼さん、磨利子には内證に仕て置てくれ給へ、シッ！ 磨利子が入つて來た」

磨利子は庭口から入て來たが、お兼を見ると、口に指を當て、あの事を話すと、合圖をする、

増「磨利さん、お兼さんを叱ておやりよ」

磨「何う仕たのです」

増「昨日、僕が持て來て呉れと頼で置いた手紙を忘れて來たのだよ、だから僕は巴里まで行て取つて來なきやならない、夫れに僕は最う一月程老父の所へ手紙を書

かなかつたし、僕が何所に居ると云ふ事も知らして来なかつたが、今日は天氣が良
いから鳥渡行て来る、何に一二時間もあれば行て来られるから、磨利さんは、美
知子さんを、相手に話して居てお呉れ」

磨「行て在つしやい、ですが阿父さんにお手紙をお出しにならないのは、そりや貴
下が悪いのよ、妾何度言つたか知れないぢやありませんか、……………早く行て、早
く歸て来て頂戴、皆な待て居ますから」
増「ウン、一時間もかゝれば歸て来るから……………」

「一二」 磨利子の決心

結婚は仕ない……………悠んな幸福は
ない……………實業な暮をする積り

磨利子は増男を送り出して後で、再び部屋に入て来て、お兼に向ひ、

磨「お兼さん、萬事都合よく行つて」

兼「え、今日は間違なく道具屋が来る筈ですの、——夫れは爾うと妾お腹が空い

て堪らないの」

磨「では波子に言て、何でも良いものを取てお食りなさいな」

お兼が出行て行くと入り代りに磨利子の友達の美知子と、岸田が入て来た、美知子と

岸田は、其の後も夫婦同様な暮しを仕て居るのである。

磨利子は美知子に向ひ、

磨「私達此處へ来て、最う三月からになるのよ」

美「本統にお仕合せでしやうねえ」

磨「え、幸福ですとも」

美「だから、曾かもよく貴女に話したでしやう、静かな、呑氣な暮しを仕なければ
人間は少とも幸福ぢやないつて、ねえ、夫れから岸田とも二人でよく言ひました
わ、……………あの磨利子さんも、今に誰れか良い人が出来れば暢氣に、幸福に暮
すことが出来るだらうと……………」

磨「本統に貴女の念が届いたと云ふものよ、最う妾、貴女の良い人や、貴女の仕合なことを見て妬きは仕なくつてよ」

岸田は夫を聞いて笑ひながら、

岸「イヤ實際、僕等は幸福だねえ、爾うちやないか美知子」

美「ねえ、磨利子さん、妾思ふに、貴女のやうな恁んな暮をして居ては不可なくつてよ、……：貴女お高くつて在しやるから、一度も妾達の所へは来て下さいませんが、若し行つして下されば、妾達の住て居る様に、此處とは變つた暮が仕て見度いと被仰るに相違ないわ、……：妾達の居る五階の部屋から庭が見えて夫れは良くつてよ散歩になぞ行かなくつても可いのよ」

岸「夫れは獨逸の小説か、ゲーテの詩にある景色を見る様ですよ」

美知子は岸田に向ひ、

美「磨利子さんの前だと思つて好い加減な冗談許り言つてらつしやる、家に居れば辛

か鳩の様に黙り込んで居る癖に、……：ねえ磨利子さん、此の人、あすこが寂しいから引越そうと言て居るのよ」

岸「イヤ、爾うちやない、五階ちや高か過るから引越そうと言て居るのだ」

美「何階に居たつて何處へも出なければ良いぢやないの」

磨利子は兩個を見て笑ひながら、

磨「本統にお二人とも、面白い事許り言て在しやるのねえ」

美「ねえ、磨利子さん、此の方年に六萬圓許り収入があるから、妾最う働かなくつても良いのですつて、そして今に、妾に鹵薄馬車を買て呉れるんですつて」

岸「多分爾うなるだらう」

美「夫れは未だ未だ先の事ですわ、何でも妾が叔父さんの氣に入る様になつて、貴下が叔父さんの相續人になる、妾があの方から姪だと言つて呼ばれる様にならなければ駄目ねえ」

岸「最う追々爾うなりかゝつて居るぢやないか」
 磨「叔父さんは未だ美知子さんを御存知ないの、でも、其の中に屹度貴女を可愛がつて下さるわ」

美「でも、あの叔父さん、何うしても妾に會て呉れないんだもの、あの叔父さんは世間の叔父さんと同じで、妾をつまらぬ女だと許り思て居るのよ、そして此の方を普通の娘さんと結婚さす積りなのよ、……けれども、磨利子さん、妾だつて普通の娘ぢやなくつて？ ねえ、磨利子さん」

岸「所があの叔父さんも大分人間並になつて來たよ、殊に僕が辯護士に成てからは大分軟化して來たよ」

美知子は笑ひながら、得意相に、

美「爾う、爾う、磨利子さん、妾言ふのを忘れて居ましたが此の人辯護士になつたのよ」

磨「ぢや、妾、此の次から事件が起つたら御願ひしましやう」

美「え、最う一度辯護をやつたのよ、妾傍聴に行つたわ」

磨「辯護に勝つたのですか」

岸田は笑ひながら、

岸「所が全然失敗したのさ、僕の辯護した奴は拾年の懲役に處せられて了つた」

美「でも、好都合でしたわ」

磨「負けて好都合で言ふ事もないでしやう」

美「だつて其の男、悪い男なんですもの、本統に辯護士なんて妙な職業ねえ、……でも言ふ事は大きいのは、兩親を殺し、兒を殺した悪人だけれど、乃公の辯口一つで、再び社會へ返してやると云ふのですよ」

磨「岸田さんが辯護士におなりならば、最う直に結婚なさるんぢやないのですか」

岸「若し私が結婚すると仕たならば……」

美知子は夫を聞いて、ブリツと仕た様子を見せて、

美「若しですつて、貴下、……妾と結婚しないで、一體誰れと結婚なさるつもり
妾程貴下を思つて居る女が世間に在つて？」

磨「何時頃結婚なさるの？」

美「最う直に結婚するのですわ」

磨「本統に貴女は幸福ねえ」

美「貴女だつて、妾達と同じ様に結婚出来るぢやありませんか」

磨「ぢや妾は誰れと結婚しなすやう」

美「増男さんと」

磨「増男さん！—あの方は妾を可愛がつては下さるけれど、妾と結婚なさることは
出来ないわ、妾増男さんの心だけは取つても、あの方の名前まで取る事が出来な
いの、……ねえ美知子さん、妾達には、一生涯消す事の出来ない事があるんで

すもの、ですから、妾、自分の良人に、耻辱を與へ度くないのですわ、……若し
妾結婚しやうと思へば明日の日にも出来ますわ、けれども妾、あの方の爲を思つ
て居ますから那樣な目に遇せないのよ、岸田さん、妾の言ふ事、間違て居ないで
しやう」

磨「本統に磨利さん、貴女の様な心掛の人はありません」

磨「妾ねえ、今迄に思ひも掛けなかつた幸福を得ましたのですから、最う此の上の
望を仕ないのですわ」

美知子は、夫れでも、岸田に向て抑捺す様な調子で、

美「でも、貴下が若し増男さんの地位に居たならば、屹度結婚してしまふわ、ねえ、爾
うでしやう、貴下？」

磨「つまり婦の眞實と云ふものは、初戀の時に現れるのだ、初めての情夫の時に現
れると云ふ譯ぢやない」

美「否え、初めての情夫に會つた時が初戀ぢやありませんか、例へば……」

岸「例へば、此處にもその例はあるが」

美「磨利子さん貴女が幸福だと思つて在つしやるならば、此の上もない結構な事すわ、夫以上の事はありませんよ」

磨「え、妾、爾う思つて居るのよ、……本統にあんなに仕て居た時、妾が心から可愛がられて居る人の傍で、働いたり、本を讀んだり、話を聞いたりする様な日が來やうとは、誰れも思ひは仕なかつたでしやう」

美「本統に妾達と同じ様にねえ……」

磨「妾、貴女達には本統の事を打明けて話すのよ、其のお積りで聞いて頂い度いのよ、……妾は最う以前は何んな女で、何處に居たか、那樣ことは忘れて了つたのよ、最う以前とは全然異つた人に成て了つたの、前の磨利子と、今の磨利子は、最う全然離れた所に立て居るの、最う、昔の磨利子の事は思ひ出せも仕ない様に

なつたわ、……何時か白い上着を着て、大きな麥藁の帽子を被つて、増男さんと一緒に端艇に乗つて流れを下つた事がありましたわ、あの時、島に上つて、其處の柳の木の下で横に成て居た時に、あの白い人影が、郷地磨利子であらうとは、誰れも想像も出来なかつたらうと思ひます、——又何時かは花環一つに、正直な一族の人が一年間生活して行ける程の金を掛けた事もありましたわ、——夫れが今は何うでしやう？ 今朝増男さんが摘んで下すつた、恁んなつまらぬ花一つでも、最う嬉しくつてならないのですもの、……是と云ふのもつまり愛して貰つて居るからですわ、恁んなにして面白可笑しく月日が経つて了ひますのよ、夫れに妾もつと幸福になるでしやう、……貴女方は御存知ないけれど——」

美「何うなるのです？」

磨「妾、貴女方の様な暮しは出来ないと言たけれど、最うこれからは那樣ことを言はなくつてよ——」

美「夫れは又何うして？」

磨「妾ね、増男さんには何も言はないで、巴里に持て居る物を皆な賣拂つて了ふの
そして家の方へは、最う歸らないの、……妾、借金は皆な拂つて了つて、貴女
方のお近くに、小さな間を借りて、質素に暮すつもりなの、世間を忘れ、又世間
にも忘れられながら、……夫れから夏になれば、妾又田舎の方へ行つて、此處
に居る様な暮をするわ、……愆んな考へは、貴女方が教へて下すつたのですけ
れど今では妾一人で解る様になつたわ」

其處へ小間遣の波子が入て來た、

波「夫人さん、是非貴女にお目にかゝり度と云て、尋ねて在つした方があります」

磨「道具屋さんぢやなくつて、……あの岸田さんと美知子さんはお庭の方へ行て
、頂戴、妾あとからすぐ行くわ、……そして一緒に巴里の方へ行きましょうよ」
岸田と美知子は、連れ立つ庭の方に下りて行つた、知らず磨利子を尋ねて來た人

は何人であらうか。

「二三」 思もかけぬ増男の父

はやく早く無禮の言……流石利子も堪
入る早々……道具屋の書付まで見らる
兼ねる……

磨利子はお兼に頼んで置いた道具屋が來た事と許り思つて居た所が案外にも、夫れ
は立派な老紳士であつた、磨利子は不審に思つた。

老「貴女が郷地磨利子さんですか」

磨「ハイ、妾が磨利子で御座います、……貴下は何人様で在つしやいますか」

老「乃公は葦原武正と云ふものぢやが」

磨「え！ 葦原様！」

武「爾うぢや、葦原増男の父ですわい」

磨利子は何と云て可いか、殆ど言ふべき言葉を知らぬ位に驚いた、一體、此の老紳
士は何のために來たのであらうか、増男さんに用事があつて、夫れで會に來られた

のであらうか。

磨「あの増男さんは、唯今此處には在しやいせんが」

武「イヤ、夫れは承知して居る、乃公は貴女と唯だ二人で話し度い事があるのぢや

……實は乃公の子は、貴女のために零落しかけて居りますぢや」

夫を聞いた磨利子は、心持眉を擡めて、

磨「夫れはお間違では御座いせんか、妾はあの増男さんから、お世話を受けて居るのでは御座いせん」

武「貴女の贅澤と金費ひの荒い事は有名なものぢや、……貴女は爾う言はれるが、

貴女外の男から絞て來た金を乃公の兒と一緒に費つて居なさるんぢやらう、以て

の外の事ぢや」

如何に磨利子が以前は賤しい稼業をして居たとは言へ、餘りと言へば、餘りの言葉である、

磨「お言葉では御座いますが、私は自分の家の自分の部屋に居るので御座いますが初めてお目に掛りました貴下に、此處で斯様なお言葉を伺ひましたやうとは思ひもかけませんでした」

武「それで、何うしたと云ふのぢや」

磨「妾、失禮では御座いますが、御免を蒙り度いので御座います」

武「イヤ、實に應對振が巧いものだ、成程世間の噂する通り、此應對振りに會ては敵はない、成程お前さんは油斷のならぬ人ぢや、……イヤ夫は兎に角としてぢや、乃公の息子はお前さんのために零落かゝつて居るのぢや」

磨「繰り返して執拗く申します様ですが、貴下は勘違へを仕て在しやいます」

武「イヤ、此の手紙を見れば判る、是れは公證人から來た手紙ぢやが、是によると増男は自分の持て居る財産を譲らうと仕て居る」

けれども磨利子は今迄に金の事では増男に一度も心配をかけた事がない、従つて、

増男の父に對しても金の事では、きつぱりした口が利けるのである。

「妾、此の事だけはきつぱりと申上げて置ます、……よしや増男さんが那樣のことをなすつて在しやるにしても、夫れは妾、毫とも知らない事で御座います、……其の證據には、平素から、妾にあれを遣らう、是れを譲らうと被仰つても、皆なお斷りして居るのですから……」

「けれども何時もか爾う言て居る譯でもあるまい」

「え、夫れは爾う云ふ事もありましたが、今の様な間柄にならない前の事ですわ」

「では今は何うちや」

「今は爾うちや御座いませぬ、妾は婦の眞實を見せて居るんで御座いますから」

「イヤ、御大層なお言葉を聴くものぢや」

「何うぞ、まア妾の申上る事を御聞き下さいまし、そりや妾なぞの様な者の言ふ

事を、世間の人は信用は仕て呉れないとは存じますが、兎に角、妾は貴下にお誓ひ申します、増男さんが那樣ことをなさいましたことは毫とも妾存じませぬ」

「けれども、お前さんは、何かで食て行かなけりやならんぢやらう」

「貴下が、那樣に被仰いますなら、申上げまいと思て居りましたが、何も彼も申上げまじやう、妾は増男さんと恚う云ふ仲になりましたして以來と申すものは、妾の持つて居りますものは、肩掛、ダイヤモンド、腕飾り、馬、馬車などに至るまで全部賣拂て了いました、恰度今も、貴下のお出を道具屋の参つた事と許り思つて居た位で御座います、今日も、贅澤品は残らず賣つて了ふ積りで御座いましたの、——其の證據には、貴下のお出の時、妾、人を待て居る様な容子で御座いましたでしやう、……これでも未だお疑ひなら、此の書付をお読み下さいまし」

磨利子は、お兼から今日受取つた道具屋の書付までを見せた、

「一四」 全然切れて呉れ

乃公の勘違へちやつた……妹の結婚に差支える……一時別れでは不足ちや

増男の父武正は、磨利子より見せられた品書を読んで、初めて自分の考へて居た事が、全然間違て居たのを氣付いた様子であつた

武成程是れで見ると、諸道具を賣拂つて、奇麗にそれを借金取りに返して、残り
を渡して呉れと云ふのだな、……して見ると、今迄の事は乃公が思ひ違へであ
つたのぢや」

磨本統に貴下は誤解して被在いました、でなければ、誰れかに欺されて在しやる
のです、……そりや妾は愚なもので御座います、過去方も悲しい事許りです、
けれども、妾は増男さんと一緒に成てからと云ふものは、何うかして過去つたこ
とを忘れ度いと許り思て居るので御座います、世間の方が貴下に何を言つたかは
存じませんが妾は本統に眞實な心を持って居ります、……貴下が妾をもつとよ

く見て居て下さいますならば、今にお解りになること、思ひます、……夫は妾
を恠んな別の人間に仕て下さつたのは、増男さんで御座いますわ、あの方は妾を
心から愛して下さいます、……可愛がつて貰ひさへすれば、女と云ふものはま
ことの道に歸る事が出来ます、本統に此の三月が間程、妾の身に取て幸福な事
は御座いませんでしたわ、……ねえ、貴下が増男さんの様に良い方で在しやい
ますならば、何うぞ、妾の事だけはあの方に悪く言て下さいますな、阿父さんの
言葉なら、あの方も必と信用なさるに相違御座いません、……ねえ、御願ひで
御座いますから」

如何に頑固な老人でも、義理と情には敵する事は出来ぬ、流石の武正老人も我を折
て磨利子に謝まつた。

武「イヤ、無禮の段々は許して下されい、乃公はな、お前さんと云ふものを知らな
かつたのぢや、お前さんが、那樣見上げた考を持って居なさうとは夢にも思はな

つたのちや、乃公は悴から少しも消息がないので、腹を立て、居たが、それもこれも皆なお前の故と許り思ふて居たのちや、……まあ、許して下されい」

磨「那樣に被仰て下さると、妾嬉しう御座います」

武「實は其の見上げたお前さんの心を見込んで、悴の行く末の事に就て、お前さんに御願があつて來たのちや、……其の御願と云ふのは、今迄お前さんに心配を掛けた事よりも、もつと重大な事ぢや」

磨利子は老人の言葉に、我れ知らず胸の騒ぐのを止める事が出来なかつた、固より増男の父が尋ねて來た事は、自分の身に取つて決して良い事ではあるまいと思つて居るが、さて、何う云ふ事を言ひ出されるのかと思つて、坐ろに胸も塞る思ひである。

磨「貴下がお出になつたのは、何か妾に恐ろしい事を御頼みになるのだらうと思つて居りました、妾は初めから爾う思つて居りました、……何ぞ被仰て下さいまし」

武「お前さんは、實に世間の女には珍しい心掛の人ぢや、乃公は夫れを見込んで頼むのちや、磨利子さん、乃公は父親としてお前さんに兩個の子の幸福を願ひに來ましたのちや」

磨「え！ 兩個のお子さんの幸福と被仰るのは、何う云ふ意味で御座いますか」

武「イヤ、夫れはお前さんが不審に思ふのも無理はない、乃公には増男の外に、可愛い一人の娘がありますのちや、此の娘が若い青年と結婚の約束が出來たので、私は愈々結婚さす事に仕たが、夫れに就て増男の奴に手紙を出した所、彼奴はお前さんに夢中に成て居て住居も乃公に知して來ないと云ふ始末……」

老人は諄々と愚痴めいた調子で話す、

武「正老人の言ふ所によれば、成程増男の眼には磨利子も立派な女に見えるであらうが、然し世間は却々爾うは行かぬ、あの女は素が素ぢやからと、彼是と言はれれば、自然妹の方の縁談にも差し支えを生ずると云ふ譯、

恸う云ふ事は、田舎は随分固い方であるから、兎に角、増男が磨利子と關係して居ては、妹の身も片が付かぬと云ふ破滅になる、爾うなる事は、實に此の老人に取つては、辛い事である、

然し、武正老人が自分の子二人の身の上を思ふて辛いと思ふよりも、爾う言はれる磨利子の方が何の位苦しいか知れない、けれども、世間の人は得手勝手至極の者である、他人がどんな苦しみにも陥つても一向お構ひはない、自分の身と自分の兒だけは援け度いと思つて居る、此の武正老人の如きは、世間にあり觸れた親心を持つて居る人である。

武爾う云ふ次第で、娘の將來の邪魔になるのぢやから、何うぞ娘を助けてやつて下されい、乃公の頼みぢや」

磨お話を聞けば、一々御尤もで御座いますわ、夫れ程迄に被仰るのをお断りする事は出来ませんわ、ではお言葉に従ひまして、妾、巴里を退いて、當分増男さん

と離れて居りましやう、夫れは妾たち兩個には随分辛い事ですけど、其處が辛抱で御座いますわ、——けれども、又の逢ふ瀬を樂みにして別れましやう、何うぞお妹さんの結婚がお濟になりましたら、手紙の往復だけは許して下さいまし」

武「イヤ、よう聞いて下さつたが、私は、お前さんの優しい氣性を見込んで言いますのぢや、もう一つ御願ひがある……」

磨「え！ もう一つ御頼みと被仰るのは？」

武「打ち明けて話すが磨利子さん、私はお前さんが一時別れるのでは不足なのぢや！」

磨「では、是れなり全然り切れて了へと被仰るのですか……」

「一五」 夫では別れましやう

一思いに殺して下さい……今の倍も寂くなる……では別れましやう

如何に好いた人の親御と言ひながら、切れて了へとは餘りな言ひ分である、手前

勝手と云はうか、無法と言はうか、餘りだ、餘りだと、磨利子は怨めし相に武正の顔を仰いで、

磨利子は餘りで御座いますわ、増男さんと妾を切れさすなんて、夫れは餘りなお仕打ちやありませんか、貴下は妾共兩個が何れ程思ひ合て居るか、夫れを御存知ないのですわ、……妾には友達もなければ親類も御座いません、固より兩親なぞは御座いませし、唯だ一人増男さんを力にして活て居るのを貴下は御存知ないのですわ、妾はあの方に命までもかけて思つて居るので御座いますわ、……夫れに病氣で長くは活きられない體で御座いますし、今に成て別れて了へば、妾屹度大病に成て死で了ひますわ、……増男さんと別れさすのならば、寧ろ一思ひに殺して下すつた方が良う御座いますわ』

磨利子が是れ程までに思ひ込んで言つて居る言葉も、老人には夫れ程に思はれぬ。まことや、婦の命は「戀」である、「戀」に敗れたために、うら若い、美しい花の様

な女の命が、見る見る中に萎れて枯れて行く例も、世間には尠くない。

青春の花は「戀」である、「戀」のなき生涯は砂漠の如き生涯である、若い女や若い男が戀の爲めに狂氣の様になるのは、決して無理な、不道理の事ではあるまいと思ふ。

けれども老人には最う昔の様な若々しい、狂氣地味な氣分はない、若いものゝ心を老人が察し得べき道理はない、今武正が磨利子に對する態度などは、實に若いものゝ氣分も心持も解らぬ態度と言て可い。

武爾うお前さんの様に言ふては何うもならん、な、お前さんは那樣に若くて、奇麗で居ながら、病氣だなどと云ふ、けれど夫は、唯心配や氣苦勞を、大した病氣の様に思違つて居なさるのぢや、なアに、爾う老人の様に、急に死で堪るものか……そりや私はお前さんに無理な事を言ふて居るかも知れん、然し、何もかも因縁ぢや、まア聞いて下されい、成程お前さんは此の三月以來、増男と思ひ合つ

て居なさるか知らんが、然し、夫れがためにお前さんは、あの若い者の將來を滅茶々にしても可いのですか、お前さんが、増男と一緒に居る中は、増男の將來は片無しぢや。……お前さんは屹度一生涯渝らぬ積りですか、急に氣が變る様な事はありませんか、急に氣が變て、外の男を可愛う様になつたと云ふ事が知れる時分には、最う遅い、……イヤ、これはつい言ひ過ぎた、許して下されい、けれども、お前さんの是迄の事を考へると、那樣ことが思はれてな」

磨「イエ、妾は、是迄に男を愛した事は御座いませんでしたわ、是れからだつて、今増男さんを思つて居る様に、外の人を思ふ事はありますまいよ」

武「夫れはお前さんは一生渝らぬにしても、増男の方で變つたとしたら何う仕ますか、あの齡で一生渝らぬ約束なぞが出来たものか、あれなり、變はらずに居れば豪氣なものぢや、誰れでも同じ事ぢや、親掛りの中は兩親を愛し、女房が出来れば、親よりも女房を可愛がる、而して、子供が出来れば、兩親よりも、女房より

も子供を可愛がるのが世間の慣習ぢや、……夫れぢやから是から先の事を、確と言ふ事は出来ませんわい」

磨「と言つて、貴下のお言葉に従へば……」

武「磨利子さん、お前さんは、増男のために總てを犠牲にすると言はれるが、其れはお前に取て何う云ふ事になりませう、成程お前さんの奇麗な間は増男も喜んで、お前さんの犠牲を受ませうが、然し其間に其の犠牲にも飽て來たら一體何う仕ます、……増男も世間並の人となつて、最うお前さんに飽が來て、以前の事を彼是と言ひ出して、お前さんを棄てたら何うなります、イヤ、まあ假りにあれが正直な男で、無事にお前さんと結婚するとなつても、此の結婚の結末は何うで御座る、貞操と云ふ事もなければ、道徳と云ふものもない、家庭と親族との關係と云ふものもない、實に索漠たるものぢや、夫れも若い中は辛抱出來るとしても、齡が老つたら何う仕ます、名譽があるではなし、前途に見込があるでなし

慰藉があるでなし、乃公が、あれの爲めに是まで二十年の間仕てやつた事も總て無益ぢや、……お前さんが、増男を思てやつて下さる事は、決して本統の同情でもなく、本統の清い結婚でもない、要りは氣紛れ同志の寄り合ひぢや、若し、お前さんが、齡を老つたら何う仕ます、お前さんの額に皺の出来る頃は、増男の眼から曇が取れて、あれの氣も變て了ひますぞ」

成程聞いて見れば、武正老人の言ふ所にも亦理屈はある、磨利子は大きく吐息をついて、

磨「本統にねえ！」

武「兩個が齡を老つてからの事を考へて見なさい、今の倍も寂しくつまらなく成ります、そして残る所と言つては唯だ悲しい辛い思より外に何もありません、な、磨利さん、貴女と増男は互に行き可き道を誤て居なさるのぢや、そして偶然に一緒の道に來なつたと云ふ譯ぢや……、だから別れて了はねばならぬと言ふの

ぢや、お前さんは、今迄の來歴から考へて見て、自分の將來が何うなるかと云ふ事を知りなさん様ぢやな、まア兎に角、三月だけの縁ぢやと思ふて下されい、………恚う云ふと、乃公は如何にもお前さんに残酷な、無理な事を頼む様ぢやがお前さんが、増男のために何もかも犠牲にしてかゝつて居なされると云ふ事ぢやから、御願ひ仕た様な次第ぢや、な、何うぞ、増男を可愛いと思ひなさるなら、乃公の言ふ事を聽いて、一つお前の心意氣を見せて下さらんか」

あゝ一度賤しい者の仲間に入れば、最う世間では二度と許して呉れないのか知ら、假令神様がお免し下さるにしても、冷酷な世間と云ふものは、何う仕ても信用して呉れない、是れ程思つて居ても、誰れも其の心根を眞實とも思て呉れない、汚れた悲しい過越し方がある許りに、一生涯妻とも呼で貰はれず、母とも呼んで親まれる事がないのであらうか。

爾う思ふと、磨利子の眼からは熱い涙が潜々と流れる。やがて、磨利子は武正に向

ひ、

磨「貴老の被仰つた事は一々御尤で御座います、よく解りました、繰り返してお話し下さいました事は、何も彼も本統の事で御座います、……貴老のお言葉に従ひまして、増男さんの事は、斷乎と諦めましやう、……貴老は、御嬢さんと増男さんのために、頼むと被仰いましたから、何うぞ貴老も御嬢さんと増男さんに被仰て下さい……、世間にはお兩個のために、一生涯の希望も、幸福も棄て、了つて、自分の心を碎いて死んで了つた女があつたと云ふ事を被仰て下さいまし、

——本統に私はこれなり最う死んで了いますわ……」

磨利子は手巾で顔を蔽ふた、美しい肩が静かに、波をうつやうに見えた。

此の光景を見た武正老人も、流石に感動して思はず涙を流した。

武「あゝ、可愛相になア」

磨「最う何うぞ泣いて下さいませな、私は貴老の涙を見てお嬉しう存じます、——

貴老のお言葉に従ひまして、妾は増男さんの將來の事を思つて別れましやう、さア、妾のする事を何でも被仰て下さいまし、何うにでもいたします」

武「夫れでは、最うお前さんは増男を思つては居らぬと云ふ證據に愛想盡しを言つて下されい」

磨利子は寂しげに笑つて、

磨「でも、那樣ごと、増男さんが信用なさらないでしやう」

武「では、お前さんの方から、立ち退いて貰い度い」

磨「爾うすれば、追驅けて在つしやるでしやう」

武「ウン、其時は……」

磨「兎に角、妾が増男さんを思て居るのは、利益のためではないと云ふ事を、信じて下さいますわねえ」

武「夫れは言ふ迄もない事ぢや」

磨「ではあの、申し兼ねますが、貴老のお嬢さんをお抱きなさいませ様に、妾を抱いて下さいまし、貴老が接吻して下さいませれば、最う夫れで私は戀の勝利者になつた積りで、ふつゝりと、あの方の事を思ひ諦めまする、そして、一週間の中に、屹度増男さんをお返しいたします、……あの方も一時は不幸の様に思ひで在つしやいませやうが、行く行くは幸福にお暮しなさいませでしやう、——夫れから今日の此の事も、決して口外は致しませんから、御安心なさいまし」

武「イヤ、見上げた、立派な婦ぢや、けれども、乃公は未だ心配でならぬ……」

磨「イエ、決して御心配に及びません増男さんは、今に妾をお嫌ひになります」

磨「う言て磨利子は鈴を鳴した、すると波子が入て来た。

磨「あのねえ、お兼さんに、すぐと来て下さる様に言てお呉れ」

波「はい……」

波子は出て行つた、磨利子は武正に向ひ、

磨「最う一言申上度い事が御座いますわ」

武「何なりとも言て御覺」

磨「今に増男さんが御歸りになつて、別れ話をお聞きになれば、屹度煩悶なさるに相違ないわ、……夫を妾、何うして見て居られませやう、其の時になつて、貴下が其處に在つしては、お互に困る様な事になりますわ、何うか今の中にお歸り下さいまし、今にあの方が御歸りになつて、貴下にお遇いになれば、萬事のこと

が破れて了ひますわ」

武「夫れでお前さんは何うする積りぢや」

磨「夫れを申上れば、屹度お止めなさいませわ」

武「夫れでも、是なり別れては、乃公はお前さんに酬める機がない……」

磨「いえ、那樣ことは何うでも可いので御座います、妾が死んだ時、妾の仕た所爲が皆な心にもない事であつたと増男さんが知て下さいませれば、私は其で満足

で御座います、何うぞ貴老方は、お幸福にお暮し下さいまし、最う二度とお目に掛る機は御座いませんわ……」

武正老人も流石に磨利子の心を哀れに思つて、涙を流しながら出て行つた。

「一六」 餘所ながら暇乞

書きかけの手紙……お前の心は判て居る……再び父の來訪

波子はお兼を連れて入て來た、先刻磨利子が呼びに遣つたからである。

兼「磨利子さん、何か御用なの」

磨「え、少しお頼み仕度い事があるの」

磨利子は先程より書きかけて居た手紙を取て夫をお兼に渡しながら、

磨「是を渡して貰い度いのよ」

兼「誰れに」

磨「宛名を讀で御覽なさい」

お兼て宛名を讀んで思はず眼を陶る、夫には安孫子男爵の名が書いてある。

磨「……まア可いから持て行て頂戴よ」

お兼は手紙を持て部屋を出て行く。

磨利子は尙ほも獨りで書き續けて居る、

磨「あ、今度は増男さんにやる手紙だわ、……あ、何う仕たら可いだらう、書かうにも書かれないわ、——妾は狂氣に成て居るのぢやないかしら、でなきや、夢でも見て居るのぢやないかしら、書く元氣もないわ」

磨利子が恚う言て獨り語を言て居る所へ入て來たのは増男である、増男は磨利子の傍に近いて、卓の傍に立つて、

増「磨利さん、お前、何を仕て居るの」

磨「あ、お歸なさいまし、……妾、何も仕て居ないのよ」

増「手紙を書いてるぢやないか」

磨「は——否え」

増「まア何う仕たと云ふのだ、蒼白な顔をして、……一體誰れに手紙を書いて居るのだ、どう、……僕にお見せ」

磨利子は取られた手を拂ひ、

磨「此の手紙、貴下に進るお手紙よ、だけど、……今は見せられないのよ、ね、何うぞ見やうとして下さいませな」

増「だつて磨利さん、僕等兩個の間には最うお互に隠すやうな事はないぢやないか」
磨「ぢや別にお互に疑ふ様な事もないぢやありませんか夫れを貴下はお疑いになるの」

増「否、僕が悪かつた、實は少し心配があつたもんだから」

磨「何んな事が出来たのですの」

増「老父が巴里の僕の宿に来たのだ」

磨「貴下お逢ひなすつたの」

増「イヤ遇やア仕ないんだけれど、宿に厳しい手紙を置いて行つたのさ、老父は、僕がお前と一緒に此處に住で居る事を知つたのさ、今晚来る筈に成て居るよ、久しく會はなかつたし、大抵何んな事を言はれる位の事は知て居るが、多分お前に遇つて見やうと言ふだらうよ、……まア罷り間違へば僕も働かなくちやならん、然しお前に愛されて居る身を取つては一日の辛勞も充分に償はれると言ふ譯さ」

磨利子の胸には、今更の様に増男が自分を愛して居て呉れる事が、泌々と感じられる、夫れを自分は別れねばならぬかと思へば、實に胸も潰る、思ひである。

磨「ねえ、貴下阿父さんと仲違ひを仕ては不可せんよ、最う來つしやるのなら妾彼方へ行って居りませう、若し妾が歸て來ても、未だ在しやる様でしたら、妾阿父さんの裾に縋つて、別れさせない様に御願ひしますわ」

幾干隠して居ても磨利子の様子は何時もより變て居る、聲さへ何だか震を帯びて居

る様である、増男は夫を變に思つて、

増「磨利さん、何う仕たのだ、何だか聲の調子も何時もの様ではなし、變だね、何も阿父が来るからと言って爾う心配する事はないではないか、何うも變だ、……若しや此の手紙に理由があるのではないか」

増男は手を延して手紙を取らんとする、磨利子は夫を遮ぎつて、

磨「此の手紙には貴下に言へない事が書いてあるのですわ、貴下御存知でしやう、誰れでも人前では話も出来ず、又打明ける事も出来ない事があると云ふ事を、此の手紙は妾が貴下を思て居る證據ですわ、何うぞ最う此上聞ないで下さいまし」

増「ウン、見なくつても可い、僕には何も彼もチャンと判つて居る、お兼さんが今朝僕に話して聞いて呉れたから、……僕も巴里に行つて来たんだ、……僕はお前が、吾々兩個のために心配して居る事も知て居る、だから僕も夫れと同じ様に心配して居るのだ、まア萬事都合よく行つたから安心お仕よ、……僕に話せ

ないと云ふのはつまり其の事なんだらう」

磨「爾う御判りならば、何うぞ妾を一寸と出して下さいまし」

増「出して呉れ」

磨「はい、鳥渡の間ですよ、今に貴下の阿父さんが入来るかも知れませんが、だから妾、岸田さんと美知子さんと、御一緒に庭を散歩して居ますよ、呼んで下されば妾直に入て来てよ、……一刻だつて貴下に別れて居られるものですか、若し阿父さんがお怒りになつたら、何うぞ宥めて下さい、そして兩個の計畫んで居る通りにして、是れ迄通りに暮しましやう、……けれども、若し何か氣に觸る様な事があつたら、許して下さいませよ、それは決して妾の本心からぢやないのだから、……そりや、妾、此の世の中に貴下程愛して居る人はないんですもの」

増「だがお前何うしたのだ、涙を流して居るぢやないか」

磨「否え、鳥渡と涙が出たんですわ……そら最う何んともないでしやう、妾、美

知子さんと岸田さんの所へ行くわ、いえ、直ぐ歸て来てよ、ソラ、最う笑つて居るでしやう」

磨利子は庭の方へ出て行つた、増男は獨りで笑ひながら、

増「ハ、ハ、ハ、別れさゝれるかと思つて大層心配して居るやうだ」

恰度其の時、小間使の波子が部屋の中に入て来た、

増「波ちゃん、お客さんが来つしたら、知してお呉れよ、僕の老父が来るんだから

……若し老父が、磨利さんの事を聞いたら巴里の方へ行つたと言てお呉れ」

波「ハイ、畏まりました」

何時の間にか最う日は西に沈んで部屋の中には、夕暮の色が静かに入て来る、

増「磨利子は理由もない事で僕を心配させて了つた、老父だつて僕の腹の中を承知

の筈だ、過去の事が何うなるものか、……磨利子を外の女と同じに思つて貰ち

や困る、あの織江さんなどはやア舞踏會、やア宴會だと唯だ一日騒ぎ廻て、陽氣

に暮せば夫れで可いのだ、そして随分僕等兩個を惱まして居る、——あゝ夫れは

爾うと最う七時だが、老父は何う仕たのだらう、今夜は来ないのか知ら、……

波ちゃん、洋燈を灯してお呉れ」

波子は洋燈を持って再び入て来た、

増「磨利さんが居ないと、随分時の経つのが長いな」

彼れは爾う言ひながら、卓の上にあつた「マノン・レスユー」と云ふ小説を取て讀んだ、

「妾は本統に貴下に誓ひます、ねえシバリエーさん、妾の心に、愛の偶像と成て在

つしやるのは貴下より外にはないのですわ、貴下は本統に妾の此の世界に於ける

たゞ一人の可愛い方ですわ、……けれども今の様な境遇になつては、何うする

事も出来ないではありませんか、其の日、其の日のパンもなく、飢えて居ては、

此の愛情も、如何することも出来ませんわ、ねえ、シバリエーさん、妾一時家に

んだ、

「妾は本統に貴下に誓ひます、ねえシバリエーさん、妾の心に、愛の偶像と成て在

つしやるのは貴下より外にはないのですわ、貴下は本統に妾の此の世界に於ける

たゞ一人の可愛い方ですわ、……けれども今の様な境遇になつては、何うする

事も出来ないではありませんか、其の日、其の日のパンもなく、飢えて居ては、

此の愛情も、如何することも出来ませんわ、ねえ、シバリエーさん、妾一時家に

歸りますわ、而して貴下の生活を豊にするために、妾一生懸命に働きますわ、ねえ、貴下、此のマノンが止むを得ず貴下と一時別れねばならぬ様になつた事を、兄の口から聞いて下さいまし……」

増男は此處まで讀んで、獨りで呟やいた、

増「何だ、此の女は本統に男を愛して居るのぢやない、此本に書いてあるのは總て欺だ、……あゝ嫌な氣持に成つた」

彼は鈴を鳴らして波子を呼んだ、

増「波ちゃん、僕の老父は何だか來そうにもない、お前奥さんに入る様に言ってお呉れ」

波「奥さん、在しやらなくつてよ」

増「何處へ行つたの」

波「直に歸るから、貴下に爾う言といて呉れと被仰いました」

増「お兼さんと一緒に出かけて行つたのかね」

波「否え、お兼さんは、奥さんよりも先に出で行つしやいました」

増「爾うか、可」

波子は出て行つた、

増「磨利子は多分道具を賣るために巴里に行つたのだらう、然し今朝お兼さんに頼で置いたから、多分止めて呉れるだらう」

爾う言ひながら増男は窓の外を覗いて見た、

増「庭に誰れか居る様だ、磨利子ぢやないか、……磨利さん、磨利さん……」

波さん……波さん、あ、波子も返辭を仕ない、實に變だな、誰れも居ないと云

ふのが、實に不思議ぢやないか、是れには何か理由があり相に思はれる、殊に磨利子は泣いて居たから、何か僕に言へない事があるに相違ない、——爾うだ、僕に嘘を言つてるんだ、嘘を言て居るに違ひない、……或としたら磨利子は死に

は仕やア仕ないか、死に行つたのかも知れない……」

恰度爾う言つて居る所へ一人の使ひの者が庭口から入て来た、

使「葦原増男さんと被仰るのは、貴下で在しやいますか」

増「え、爾うです、僕が葦原です」

使「私は御手紙を持って参りましたが……」

増「何處から……」

使「巴里から」

増「何人のお使ひですか」

使「一人の御婦人から頼れました」

増「一體お前さんは何處から入て来なすつた」

使「お庭口が開いて居ましたから、其處から入て参りました」

使ひの者は手紙を渡して歸て行く、

増「あゝ是れは磨利子の手紙ぢやないか、何處かへ来て呉れと云ふのだらう」

増男は手を慄はしながら開封して、一行許り讀んだ、

「此の手紙を御覽なされ候頃は……」

恰度讀みかけて居る所へ、増男の父武正が入て来た、増男は手紙を讀まないで卷き

收めた。

「一七」父の苦言

家名の汚れ……是非を
説く……終に決心す

親子は暫時の間相對して言葉がなかつたが、増男は父の顔の冷かな中に、何處か緊張した所のあるのを見て、先づ話の容易ならんと言ふ事を想像した、

増「何時入來したのです、阿父さん」

武「今日來た」

増「此處へ直と入來したのですか」

武「ウン、此家を指して来た」

増「お手紙は今日巴里の方へ行って拜見しました」

武「あれに關して面倒な話があるのぢや、お前は總ての事を此の父に打明けて話して呉れるか」

増「ハイ、申上げます」

武「では聞くが、お前が此家の郷地磨利子と云ふ女と同棲して居ると言ふのは本統の事か」

増「ハイ」

武「一體此の女は、以前何をして居たのぢや」

増「女優も仕て居りましたし、人の圍ひ者にも成て居りました」

武「お前が近頃、乃公と妹の所へ來ん様になつたのは、要り此の婦のために來なくなつた譯ぢやな」

増「爾う云ふ譯でも御座いせんが、………まア多少は………」

武「でも、お前にも此の女は餘程氣に入て居ると見えるな」

増「ハイ、夫れは阿父さんや妹の所へも餘り行かなくなる程ですから、お解りで御座いしやう、けれども、私が御無沙汰をいたしました段は幾重にもお詫をいたします」

大膽な卒直な此の答辯には父も少し案外の面持であつた。

武「お前は何時迄も恁んな事をして暮しては居られないと云ふ事を承知して居るだらうな」

増「ハイ、夫れは出來ない事かも知れませんが、然し………」

武「然し、何う仕たと云ふのぢや、………何と言つたつて、結局私が許さん………云ふ事をお前は考へないのか」

父の言葉は飽まで冷酷である、

増「けれども阿父さん、私が不正直な事をして、御先祖のお名前を汚さん以上は、差支えないと思ひまするが……」

實に戀程恐ろしいものはない、親にも告げず斯様な放埒を仕て置いて、此の答えはまア何と云ふ事であらう、——父は爾う思つた。

武「イヤ、今日唯今から那樣こと止めて貰い度い」

増「……と申すのは、何う云ふ譯で御座いますか」

武「お前が汚さなと思つて居る家名は、夙に汚されて居るから、爾う言ふのぢや」
増「お言葉を少し理解し兼ねますが」

武「解らんと云ふのなら言つて聞そう、成程、女を拵えるのならば、拵えるで可い、けれども、何も田舎の方まで、不評判を立て、我家の名を汚さんでも可いではないか」

増「けれども、阿父さん、私が磨利子と同棲して居る事は別に何でもない事で、私

の姓をあれに名乗らして居る譯ではなし、又、私は自分で出来るだけ金を工面は仕て居りますが、別に借金など仕ても居りませす、爾う貴下からお叱りを受ける程の事はなからうかと存じます」

武「馬鹿を言ひなさい、親と云ふものは、何時でも自分の兒が邪道に陥らんとして居るのを救ふ権利があるのです」

増「ですけれど、阿父さん」

武「お前が何と言つても駄目だ、元來純潔な愛と云ふものは、あんな黒人にある譯のものぢやない、マノンの様な女には、必ずグリユーの様な情夫は附きものだ、……」

……兎に角今日限り別れて了ふが可い」

増「お言葉に背く様では御座いますが、何うも夫れだけは出来ません」

武「イヤ、何うしても爾うさせねばならん」

武「けれども、私は彼と別れる位なら、生きて居る甲斐は御座いません」

武「こりや、ようく氣を落着けて考へるが可い、お前に言て聞いて居るのは、現在の父親ちやぞ、お前が生れてから、今日の日まで、お前の幸福を祈て居る父親ちやぞ、誰れとでも、勝手に一緒に成て居て、夫れで濟むと思ふとるのか」

増「けれども、阿父さん、あの磨利子は最う昔の磨利子ちや御座いません、あれは私の愛により、今は全く別人間に成て居りまする」

武「ちやお前は墮落した女を救ふて歩くのを名譽として居るのちやな、那樣なことを言て居るが、今に四十位になつたら、お前も今日の事を馬鹿々々しいと思ふて笑ふやうになるだらう、兎に角、悪い事は言はぬから切れて呉れ」

けれども増男は一言も答えぬ、父は言葉を重ねて、

武「な、増男、お前も未だ二十四の若い者ぢやから、一圖に爾う考へるのも尤もぢやが、兎に角切れて了へば、女の方も何うにか片はつくだらうし、お前も父や妹の所へ歸て居れば、自然と熱も冷めて來る、まア、強情を張らずと、乃公と一緒に歸て呉れ」

に歸て呉れ」

然し増男は何うしても父の言葉に従はうとはせぬ、

増「阿父さん、貴下は磨利子を御存知ないから爾う云ふ事を被仰いますが、あれは高尚な、無慾な、實に見上げた婦人で御座います」

武「ほう、那樣に無慾の女が何うしてお前の財産を譲り受けやうと仕たのちや」

増男も父の此の言葉には驚いた、父が夫を知て居やうとは實に思ひもかけなかつたのである。

増「それを何うして御存知で在しやいます」

武「乃公の公證人から聞いたのちや、乃公はお前の母が遺して死んだ財産を、莫運女のために消はし度くないのちや」

増「でも、阿父さん、磨利子は那樣ことは少とも知らないのです、……………何うぞあれを、那樣な悪い女の様にお思ひ下さらん様に願ひます」

増男は恚う言ひながら、先刻磨利子が自分の所へ持たして来た手紙を、卓の上で開いて見た、そして二行許り讀むと思はず呀と聲を放つて、父武正の腕に凭れかゝつた、

武「何う仕たのぢや、何う仕た、増男、何が書いてあつたのぢや」

増「全然、欺されて了つた……」

増男の眼から口惜し涙がハラ／＼と滾れた。

夫れを見た武正は、磨利子が自分との約束を違へずして、増男に愛想盡しを書いて居るのを知つたのである。

磨利子は自分の愛を犠牲にして葦原一家のために幸福を計らんとしたのである。

「あゝ可愛相な事を仕た」

と思つて武正老人も心では千萬無量の感じが仕た。

「一八」 我家に歸る

磨利子の手紙……我家にと歸る……未だ夢は覺めぬ

父と磨利子の間に默契が出来て居て、夫れが爲めに恚んな破滅に成つたと云ふ事を知る由もない増男は磨利子の手紙を忘れる事は出来なかつた、手紙には次の様な文
言が書き列ねてあつた、

此の手紙御覽の頃は妾は最う他の男と關り合ひ居候へば、兩個の仲は今日を限り
と御諦め下され度候、

御歸國なされ候て、父上様、御妹御様と御一緒に御暮しなされ候様念じ上り、
末永からぬ身をもて、唯の一度にても御許様に思はれ生涯に一度の幸福を得たる
此の磨利子を失はせられ、定めし御許様にも御嘆きの中にあらせられ候はんかと
存じ候へど、妾が如き身の不幸をつゆ御存知なき御妹御様の御許に御歸りなされ
候は、別れの辛さも、間もなく御忘れ遊ばされ候はんかと存じ候、かしこ

此の手紙を繰り返して讀んだ増男の心中は、實に血汐が湧き立つ心地であつた。増男は精神に非常な打撃を受けた、今は最う父と議論をする勇氣もない、父の勧める儘に一時我が家に歸ることに仕た。

父の言葉に慰められて増男は翌日乗合馬車に父と同乗して田舎の方に出發した。

父は行く道々でも頻りと増男を慰めて見たけれど、増男は夫れ位の事で慰められ相にもなかつた。

彼の胸中には磨利子の外には何者もない様子であつた。

家に着いてから、初めて妹と抱き合つた時、増男は磨利子の手紙の事を思ひ出した。成程兄思ひの妹の傍に居る事は良い事には相違ないけれど、兄妹が精一杯の愛も、戀人の笑一つにも及ばなかつた。

其當時は狩獵の時期であつたから、父は近所の友人などを集めて山獵を催して呉れたが、増男は、別に面白くも思はず、唯だお相伴につき合つて居たに過ぎぬ。

父の武正老人は増男の此の様子を見ては、流石に心を痛めた、若しや病氣にでもなれば仕まいかと、心配しては、唯だ氣を紛れさす様にと、唯夫れ許り心掛て居た。妹は又妹で、以前快活であつた兄の増男が急に沈鬱な人になつたので、何う仕た事かと心配許りして居る。

恁んなにして不愉快な日が幾日となく續いた、終に或る日の事、増男は辛抱し切れなくなつて、一度巴里へ行かして頂き度いと父の武正老人に頼んだ、父は巴里にやる事を甚だ危険に思つたが、然し此の儘にして置いては、如何なる事が出來するかも知れないと思つて、兎に角一度巴里にやる事を許可した。

「では、直と歸て来てお呉れよ」

と深く注意を加へて、増男を出してやつたのである。

「一九」別れて後

今一度遇ひ度い………藍ながら機子を聞く………死んだ兩個の過去

増男が巴里へ行つたのは、今一度磨利子に會ひ度い許りで行つたのである。けれども、磨利子は今では最う他の人の持物に成て居るから、會はうと思つても爾う中々容易に會ふ事が出来ない、増男は以前交際した友達の所に入出して、せめて餘所ながらも磨利子の噂を聞かうとして居る。

今日しも彼は磨利子の友達であつた織江の家を尋ねて行つた。

織江の家では織江と其情夫の郷田、夫れに増男の友達の加藤進とお兼、その他二三の人が打交つて頻りに紙牌を戦はして居る、一頻り勝負が済んだので、加藤は織江に向ひ、

加「夫れは爾うと今夜は磨利子さんは來ないのかね」

織「來つしやる筈に成て居ますわ」

加「増男君は何うしました？」

お兼が横合より夫れに答へた。

兼「増男さんは最う巴里には在しやいませんよ、——貴下、あの事を御存知ないのですか」

加「イヤ、少しも知らぬ」

兼「磨利子さん今ちや増男さんと切れて居るのですよ」

加「え、何時から」

兼「最う一月になりますわ」

加「イヤ、えらい事になつた、那樣ことがあらうとは少しも思はなかつた」
噂をすれば影とやら、恰度其處へ増男がやつて來た。

兼「まア、増男さん………」

加「僕等は恰度今君の事を話して居た所さ」

兼「貴下トウルに在しやると思て居たのに、爾うぢやなかつたのですか」

増「爾うぢやないよ」

加「でもよく来たね」

兼「其の後貴下磨利子さんにお遇ひになりませんか」

増「いや、會はない」

兼「今にあの方も此處へお出になるでしやう」

増「ぢや會つて見やうかな」

兼「最う貴下何とも思ては在しやらないの」

増「え、何とも思て居ない、だが此處に居ても可いかね」

兼「ぢや、最うあの方の事は考へては在しやらないのですか」

増「爾う言ふ譯ぢやないさ、磨利子は、あんなに手輕るに別れて了つたが、然し、

僕は以前同様矢張あの女の事を思つて居るよ」

兼「けれども、良い時に別れましたわね、も少しの事で何もかも賣拂つて了ふ所でした」

増「磨利子には最う借金は少しもないのか」

兼「え、全部拂つて了いましたわ」

増「ウン、そりや良かった」

爾う言ふ言葉にも何處となく嘲笑を帯びて居る所があつた。

兼「夫れも、あの安孫子さんが出したんですよ、夫れであの方も終に平素の念が達いたのですよ、お蔭で磨利子さんは馬や馬車や、腕環や一切のものを取り戻したんです、今ぢや結構ですわ」

増「ぢや、巴里の方へ歸て来て居るのだな」

兼「え、貴下が在つしやらなくなつてからは、最う二度と田舎の方へ行かないと

言つて在りました、夫れから彼處は全然引上げて了つたのですが、貴下の荷物
 は私の所に置いてありますから取りに来て下さいますなら、何時でもお渡いたし
 ます、……それからあの中で貴下の名前の頭文字の附いて居た状挟みだけは、
 磨利子さんが持つて行つしやいました、取り返してあげまじやうか」
 夫を聞いた増男は流石に一種の感に打たれた。

増「可いよ、あんなもの」

兼「夫許りぢやないのですよ、此頃の磨利子さんの様子と言つたら、そりや前とは
 全然變て居るんですからねえ、……夜などは眠られないからと言つて、此頃で
 は諸方の舞踏會へ行つたり、宴會につき合つたりして居るもんですから、此の間
 は三日許り褥に就いて居たのですわ、……夫れからお醫師さんがもう起ても可
 いと言つて許すと、今度は又以前と同じ様な亂暴をやりながら、死んでも可いと
 云ふんですもの、……貴下一度遇いに行つてお進なさいな」

増「まア、會ないで置う、僕等兩個の過去は最う死んで了つたのだから」
 兼「那樣に諦めて在つしやれば可いわ」
 恰度其處へ美知子（磨利子の友）の情人と言はれて居る岸田がやつて來た。
 増「お兼さん、僕は岸田君と少話があるのだから失敬するよ」
 兼「さア、何うぞ」
 お兼は又もや外の人と一緒に紙牌仲間に入つて行つた。

「110」戀に負て賭に勝つ

嫌味を並べる……男爵
 と勝負……増男の勝利

増男と岸田は相對して坐つた。

増「君、僕の手紙を見て呉れたかね」

岸「見たよ、夫れで此處へ來た譯だ」

増「君、變に思つたらうな、恁んな、餘り來つけない所に來て呉れなんて言ふたか

ら……、君は其の後磨利子に遇つたかね」

岸「イヤ、君と一緒に居た頃に一番最後に僕が行つたね、あれ以来遇ないんだよ」

増「ちや、君は磨利子の事は何も知らないね」

岸「全く何も知らない」

増「君は磨利子が僕を愛して居たと思ふか、何うかね」

岸「爾う思つてるね、今でも……」

増男は磨利子が自分の所へ送つて来た手紙を岸田に渡しながら、

増「君、讀で見給へ」

岸「磨利さんが書いたのか」

増「爾うだ」

岸「何時」

増「一月程前の事だ」

岸「君は此の手紙に返事を遣つたのかね」

増「返事が出せるもんか、突如に此の手紙をぶつ付けられたんだもの、全く僕は気が違やア仕ないかと思つた、僕があれ程夢中に成て愛して居るにも拘らず、磨利子は僕を欺くんだもの、僕は實に死で了やア仕ないかと思つた位だ、全く磨利子は人情と云ふ事を知らない奴だ、此の事件以來、僕は阿父に連れられてトウルの家へ歸て居たが、僕はあんな所に居られやア仕ない、僕は今でも夜もおち／＼眠られないと云ふ始末さ、とうと、僕は辛抱し兼ねて飛び出して来たよ、僕は磨利子に最う一度會はなけりや活ちや居られない様な気がする、そして、あの手紙に書いてある事を、磨利子の口から聞かなけりや気が済まないよ、だから、此處で遇つて見れば、可愛さが餘つて、憎さが百倍する様な事になるかも知れない、何れにしる、何か事が起り相なので、實は君に来て貰つた様な次第だ」

岸「ウン、僕も出来るだけ盡力するさ、けれどもまアよく考へ給へ、女の事に關係

した事は、往々行いが卑怯な事になるから、未練も可い加減に仕給へよ」
 増「可いよ、夫れは僕も心得てるが、然し君、あの女は情夫を持って居るんだよ、だから僕も言てやらなきアならないんだ」
 恰度其處へ下男が、磨利子と安孫子男爵の來た事を知せて來た。

増「ヤ！ やつて來たな」

磨利子は、安孫子男爵と一緒に來た、安孫子男爵と言へば、初め磨利子のために觸られ扱いた男であるが、今では、磨利子の情夫に成て澄し込んで居る。織江は磨利子を出迎えるために、部屋の出口まで行つたが、

織「まア、磨利子さん、遅かつたのねえ」

安孫子男爵は來客の誰れ彼れに握手しながら、

安「やア、何うも遅くなつて相濟ません、實は僕等はオペラに行つたものだからね」

お兼は、磨利子に向ひ、

兼「磨利さん、身體は如何です」

磨「え、有難う、大そう可いのよ」

兼「あのねえ、此家に増男さんが來て在つしやるのよ」

磨「え！ 増男さんが……！」

兼「え、爾うなの」

其時磨利子は紙牌臺の傍に腰をかけて居た増男に、氣が付いた、しやう事なしに、困つた顔をして會釋すると、増男は唯だ冷淡に會釋を返す。

磨利子はお兼に向ひ、

磨「ねえ、お兼さん、妾此へ來るんぢやなかつたわ」

兼「何故？」

磨「何故つて、……お前さん何うして知して呉れなかつたの」

兼「でも、何うせ、遅かれ早かれ、一度は増男さんに遇はなけりやならないんだわ
——早く會つた方が良かなくつて」

磨「あの方、何かお前さんに話して？」

兼「え、話してよ」

磨「妾の事に就て？」

兼「え、爾うなの」

磨「何を被仰つて？」

兼「あの方、貴女の事怒て居らつしやらなくつてよ、當り前の事だと言て在つした
わ」

磨「爾うぢやないでしやう、あの方何だかッンとして、會釋をして在つしたし、夫
れに顔の色も蒼白だつたわ」

其處へ安孫子男爵が來て、小聲で磨利子に、

男爵「磨利さん、葦原君が來て居るぢやないか」

磨「え、知てますわ」

男爵「お前、本統に、あの男が來て居ることを知らないで此家へやつて來たのか」

磨「え、全く爾うなのよ」

男爵「ぢや、お前、あの男と口を利いちや不可いよ」

磨「え、そりや話なぞ仕ませんわ、けれども、あの人の方から話し掛けて來れば
話さない譯には行かないわ、お兼さん、お前さん、妾の傍について居てお呉んな
さいな」

恰度其處へ醫師がやつて來た、此の醫師も先刻から紙牌仲間の一人であつた。

醫「や、今晚は」

磨「お、先生でしたがまア貴下、何うして妾の顔許り見て在しやるの」

醫「私はね、何うしたら貴女の病氣を癒す事が出来るだらうと、夫許り考へて居る

のです」

磨「何處か様子が違つて居まして」

醫「え、大切になさらくちや不可せんよ、私が明日診察に行つた時ミツチリ叱つて進ましやう」

磨「え、何うぞ充分にお叱りを願ひます、——最うお歸りになるのですか」

醫「え、最う直きに歸ります、私は、最う六ヶ月から診て居ますけれど、矢張り同じやありませんか、大切になさらくちや不可せんよ」

磨「有難う御座います」

磨利子はお醫師と握手して別れた、其處へ美知子の情夫の岸田が近づいて來た。

岸「や！ 今晚は、久闊でしたな、磨利さん」

磨「まア、お久し振りでしたわねえ、美知子さんも御一緒」

岸「否え」

磨「爾うでしたか、美知子さんにも暫く遇いませんわねえ、ねえ岸田さん、本統に美知子さんを可愛がつて進て下さいよ、……心から愛される程幸福な事はありませんわ」

恁う言ひながら磨利子は美しい眼を拭いた、岸田は夫を見て、不審に思ひながら、

岸「何うかしたのですか、磨利さん」

磨「え、岸田さん、妾は本統に不幸ですわ」

岸「泣くのはお止なさい、……まア何うして恁んな所へ來たのです、悪い事は言ひませんから、早くお歸りなさい、ねえ磨利子さん」

磨「何故ですか？」

岸「貴女が此處に居ると、何んな事が起るか知れやアしない、増男君が——」

磨「増男さん、大層妾を憎んで在つしやると聞きましたか、本統ですか」

岸「イヤ、増男君は矢張り貴女を愛して居るが、あの顔の蒼白に成て居るのを御覽

なさい、自分で自分の心を抑え切る事が出来ないでしやうから、今に貴女の事で安孫子男爵と喧嘩でもやりますよ、だから貴女は病氣に假托けて、早くお歸りなさい」

岸「では、増男さんと安孫子さんが決闘なさるかも知れませんが、ちや歸りますわ」
磨利子は安孫子男爵の傍に行つて、最う歸るからと言へば、男爵は以ての外と云ふ顔付をして、

男爵「一體、何うしたと云ふのだ、何うして歸るのだ」

磨「大相気分が悪く成て來たんですもの、妾、歸り度いわ」

男爵「イヤ、気分が悪る相には見えない、多分あの葦原が居るから爾う云ふのだらうお前が一人で先へ歸て、乃公許り、馬鹿面をして此處へ残つて居られるか何うか考へて見て呉れ、………兎に角會の果る迄此處に居て貰ひ度い」

織江は磨利子を歸し度くないものだから、話を外へ轉じやうとして、今夜のオペラ

の話を持ち出した、

織「安孫子さん、今夜のオペラは何でしたの」

男爵「ファボリットでした」

増男は傍で夫れを聞きながら、

増「ちや、情夫を欺らかした婦のオペラぢやないか」

お兼は夫れを聞きかねて、

兼「まア、那樣ことを言ふもんぢやありませんわ」

すると、其處に居た米子と云ふ若い女が、

米「憚りさま、此處には、那樣な女は一人も居ないんですからねえ………」

増「居ない、ちや、居たら何うする」

米「ちや、何處に居ます」

増「何處にでも居るぢやないか」

織「情夫だつて同じぢやありませんか……」

増「婦がやつて見せる様にねえ……、ハ、ハ、ハ」

岸田は増男の傍に寄つて来て、

岸「増男君、那樣な事を言はずに紙牌でもやつて見やうぢやないか」

増「戀に失敗るものは、博賭には勝つと云ふ諺があるから、本統か嘘か一つやつて見やうか」

岸「イヤ、爾うぢやない、君は博賭に強いから、戀に弱いのだ」

増「爾うだ、今夜は一つ大に負して、ウンと金を持って歸て、田舎住居でもするさ」
織江は横から口を出して、

織「お一人で田舎住居？」

増「イヤ、一度僕と一緒に田舎住居をして呉れたが、今ちや此方を棄て、了つた人があるから、その人とでも一緒に行くさ、——何に、金さへあれば、譯はないの

さ

増男は恁んなに當てつけて厭味を言つて見たけれど、磨利子は何とも言はぬ、増男も心の中では「磨利子は何んとも答へないな」と、一人で妙に思つて居る。

岸田は夫を聞きかねて、

岸「増男君、止し給へと言つたら、——見給へ、磨利さんが可愛相ぢやないか」

増「なに、唯だ話だがね、其の話の中に、滑稽な紳士が出て来るんだ」

夫れを聞いて居た安孫子男爵も、流石に堪り兼ねて一步増男の方へ寄つて行つた、
男爵「おい君！」

夫れと見た磨利子は、安孫子の傍に寄つて行つて、

磨「貴下、増男さんに手出しをなさると、妾、最う貴下と一緒に居ませんよ」

増男は安孫子に向ひ、

増「何か被仰つたのですか」

男爵「え、言ひました、貴下は大層勝負事に強い相ですな、お金の入用な事も知て居ますから、大に勝して進度いものですな、さ、一つやりますか」

増「え、お相手になりませう」

男爵「ちや百ルイ賭けませう」

増「何ちらの方へ」

男爵「君の反対の方へ賭けませう」

増「ちや僕は百ルイを左の方へ賭けませう」

男爵「ちや、吾輩は右の方へ賭けやう」

加藤が札を明けて見た、

加「右は四點、左は九點、増男君の勝だ」

男爵「ちや、今度は二百ルイだけ賭けやう」

増「二百ルイ、可いのですか、戀には失敗ても、賭博には勝つのですから」

加「あ、今度も六點と八點だから増男君の勝だ」

織江は傍からませつかへし乍ら、

織「とうと安孫子さんは、増男さんに田舎住居の費用を拂ひましたねえ」

磨利子は夫れを見て居ても、唯だハラノする許りである、

磨「まア何うなるんだらう」と獨り考へて居る、

すると織江は一同の人々に向ひ、

織「あの食卓の用意が出来ましたから、何うぞあちらへお出下さいまし」

増男は未だ椰揄ひ半分で男爵に向ひ、

増「どうです、最う少しやりますかな」

男爵「イヤ、今夜は最うやめる」

増「何時でも、お相手仕ますから、お出なさい」

織江は増男の腕を執りながら、

織「まア大相貴下の脈は高いわねえ」

増「え、僕は何時も賭に勝つた時は懲うなんです」

織江は増男の手を取って食堂の方へ行て了つた。

安孫子男爵は磨利子に向ひ、

男爵「磨利子、一緒に食堂の方へ行かうぢやないか」

磨「え、妾、お兼さんと少し話す事があるんですもの」

男爵「ぢや十分許りは可いとしやう、若し夫より遅くなつたら見に来るぞ」

磨「え、よう御座んすとも——」

一同其處を去つて食堂の方へ行つた、後には磨利子とお兼の二人が残つて居る。

「二二」 衆人の前で耻辱

磨利子と増男……僕と一様に
迷つて呉れ……怒り一場の騒動

一同の去つた後を見送つて磨利子はお兼に向ひ、

磨「ねえ、お兼さん、鳥渡行つて増男さんを呼んで来て頂戴ね、無理にも頼んで——」

妾、毫し話し度い事があるんだから」

兼「若し嫌だと言つて来て下さらなかつたら何うします」

磨「大丈夫、那樣ことは言やア仕なくつてよ、あの方は妾に會て、厭味を言ふ積り

なんだから、——さア早く行て来て頂戴」

お兼の行つた後を見送つた磨利子は、

磨「あの方、是非来て下さる事は解つて居るけれど、然し妾、あの方の阿父さんに

約束した通りに、矢張り今日も愛想盡しを言へるだらうか、……あ、あの方は

妾を悪んで在つしやるわ」

磨利子が獨り言を言つて居る所へ増男はお兼に伴れられて入つて来た。

増「磨利子さん、何か僕に用事でもあるんですか」

磨「え、妾、貴下に話し度い事があるんですわ」

増「話し給へ、承りましやう、——何か貴女は僕に辯解しやうと云ふんだね」

磨「否え、那樣な話ぢやないんです、——最う最う濟んだ話は仕ますまい」

増「成程ね、其の話が出ると貴女は耻を掻く許りだからね」

磨「ねえ、那樣に妾を蔑まないで下さいまし、妾、慙んなに弱て居るんですもの、

——本統に最う半分は死んで居るのよ、……ねえ貴下、何うぞ憎まないで、妾の話聞いて下さいまし、……夫れよりは、話す前に握手を仕して下さいませんか、ねえ増男さん」

増男は手を引込めて、

増「眞平です、御用と云ふのは夫れ丈ですか」

増男は爾う言て將に立ち去らんとする、

磨「那樣になさるものぢやありませんわ、——ねえ増男さん、貴下何うぞ此の巴里を立退いて下さいまし」

増「巴里を立退いて呉れ」

磨「え、貴下は阿父さんのお傍へ歸て下さいまし」

増「夫れは又何故だ」、

磨「安孫子さんが貴下に決闘でも仕かけ相ですわ、爾うなれば苦むのは唯だ妾一人ですわ」

増「ぢや、喧嘩を仕かけられるから逃ろと云ふんだね、貴女は僕に卑怯未練な行爲を仕ると言ふんだね、……成程ね、貴女の様な女には夫れ位の考へより外にはあるまいよ」

磨「増男さん、妾、貴下に別れてから随分苦んだのですわ、夫れ以來と云ふものは病氣も大層悪くなつたのです、ねえ、増男さん、以前の情愛を思つて下さつて、何うぞ阿父さんの所へお歸り下さいまし」

増「イヤ、よく判つた、ぢや貴女は自分の情夫の事が心配なので、僕に此の巴里を

立退と云ふんだな、——成程、僕がピストルで奴を射か、さなくば洋剣で奴を突き殺して了へば、貴下は弗函をなくすると云ふ譯だから、心配するのも無理はないね」

磨「否え、貴下が殺されるでしやう、夫れが妾心配ですわ」

増「ハ、ハ、生きて居たつて、死だつて、貴下には御心配御無用です、——貴女は何と言って手紙に書いて來ました「外に情夫が出來たから、妾の事は忘れて下さい」と書いて來たぢやありませんか、夫れ程馬鹿にされた僕だ、何も今更僕の死ぬ事を心配して貰はなくつても可い、……僕が慫うやつて死なないで居るのは、全く復讐を仕度いから生きて居るのです、僕が巴里に歸て來たのは、要り安孫子男爵に對して、生死の問題を提出するためであつた、……夫れ程に意氣込で來て居る僕が、奴に殺されるものか」

磨「今度の事件に就ては、安孫子さんには何の罪もありませんわ」

増「餘程惚れて居るんだと見えるね、僕が安孫子を憎む理由は夫だけでも充分だ」

磨「貴下、妾があの人を愛して居ない事を、前からよく御存知ぢやありませんか」

増「夫れなら、何故貴女は彼奴のものになつたのだ」

磨「何うぞ、夫れだけは聞かないで下さいまし、妾、よう話しませんわ」

増「ぢや、僕が言て見やう、貴女は人情も誠もない女だから、慫んな男の手に従いて自分の情を賣り物に仕て了つたのだ、貴女には、名譽も生命も棄てかゝつて居る男よりも、馬車やダイヤモンドの方が可いと見えるね」

磨「え、え、皆な其の通りですよ、妾は畜生ですよ、人非人ですよ、貴下を欺かした悪い女で御座いますよ、……けれども妾がつまらぬ女である程、貴下は妾を早く忘れて下さるでしやうし、貴下の命も生涯も、價値が出來て來るのですわ、何うぞ御願ひで御座いますから此の巴里を立退いて下さいまし」

増「そりや立退いても可いが、一つの條件がある」

磨「どんな條件ですか、場合によれば應じますわ」

増「貴女も僕と一緒に立退きなさい……………」

磨利子は思はず一步後に退つた、

磨「夫れ許りは御断りいたします」

増「何に、出来ないから断る？」

磨「あゝ、何うしやう……………」

増「ねえ、磨利さん、僕は気が狂つて居た、僕の頭は全く狂つて居るのだ、……………」

僕は貴女を一時憎で居る様に思て居たけれど、矢張り愛して居たのだ、ねえ、磨利

さん、僕はお前の意志の弱かつた事を責めは仕ない、總て夫れは境遇の罪だ、：

……………僕は總て過去を忘れて了ふ、唯だ僕はお前を可愛相に思ふだけに、此の安孫

子男爵を憎く思ふよ、唯だ一言、悪かつたと言つて後悔してお呉れ、僕は何事も

水に流して許して進るから、ねえ磨利さん、そして僕等兩個は此の巴里を逃げ出

して、他人に遇はない所へ行かうぢやないか、そして唯だ兩個限で互に愛し合う
ぢやはないか」

磨「そりや妾、貴下のお傍に居る事が出来るならば、長い一生涯を、唯だ一日だけ
の幸福と換へ事しても嬉しいのですわ、……………けれども、夫れも思ふやうになり
ませんわ」

増「夫れは又何う云ふ譯だ」

磨「妾と貴下の間には、最う越すに越されぬ大きな淵があるのですわ、ねえ、兩個
とも不仕合せものだわねえ、……………ねえ増男さん、何うぞ此の巴里を立ち退て、
妾の事をふつりと忘れて下さいまし、妾、貴下と關係しないと云ふ事を誓つて居
るんですもの」

増「誰れに誓つて居るのだ」

磨「妾に、其の誓を求めるだけの権利を持つて居る人があるのです、其の人に誓つて居

ますの」

増「ウン、そりや安孫子の奴に相違ない」

磨「え、爾うよ」

増「安孫子とお前は本統に愛して居るのか、爾うなら、爾うと言って呉れ、僕は巴里を立ち去るから……」

磨「え、妾は本統に安孫子さんを愛して居ますわ」

夫れを聞くと同時に、増男は後の扉を開けて、食堂に居る多数の客を呼んだ。

増「諸君！ 皆な此處へ来て呉れ給へ」

増男の聲に驚いて食堂に居た紳士淑女は何事が起つたのかと思つて、ドヤ／＼と入て来た。夫れを見た磨利子も思はず顔の色を変た。

増「何をなさるんですか」

増男は磨利子の言葉には耳も假さず、多くの客に打向ひ、

増「諸君、此の女を御覧ですか、此の女は一體何者です」

一同は呆氣に取られて、

一同「磨利子さんぢやないか、……一體何う仕たと云んだ」

増「此の磨利子と云ふ女は、僕と同棲して居た頃に、僕の生活費のために、馬車や馬や、ダイヤモンドを賣て呉れました、そりや實に可い心掛けです、けれども、僕は夫がために、全く不幸なものに成て了いました、諸君、僕は何等の報酬も與へずに、磨利子の提供した犠牲を受けたのです、僕は今に成て夫を後悔して居ります、……けれども諸君、未だ遅くはない、僕は今、其の金を全部返してやります、……諸君は證人に成て呉れ給へ、さ、僕は今此の女に對する借金を一切拂ひます」

増男は恚う言ふや、忽ち先刻儲けた金貨と紙幣を取て磨利子の顔に叩きつける、餘りの事に、磨利子は呀と言つた儘、其處に倒れて了ふ。

夫れを見て居た安孫子男爵は、
 男爵「馬鹿野郎！ 亂暴するな！」
 と叫びながら増男に向て飛掛らんとしたが、多くの人々に支えられる。……醫師
 は又磨利子の傍にかけ寄つて介抱すると云ふ始末、かくして宴會の席は一場の騒ぎ
 を來したのである。

「三三」 病床の磨利子

加藤の親切……醫師の
 來訪……結婚の招待狀

衆人の前で、増男から辱めを受けた以來、磨利子の胸には非常な痛苦を覺えた。
 失戀の悲み、夫れに加えて病氣の重つたために、磨利子は終に、外出も出來ず病床
 に横る身となつた。
 今夜も磨利子は昏々と寝入つて居る、其の傍に増男の友達の加藤が長椅子に腰をか
 けて静と病人の様子を眺めて居る、

加「あゝ、乃公は一寸眠むつた、……何も用事はなかつたか知ら……」
 加藤は鳥渡首を上げて磨利子の様子を伺つた、
 加「ウン、相變らず眼つて居るな……、一體何時だらう」
 時計を出して見て、
 加「ウン六時だな、未だ夜が明けないな、ドレ、ストロブでも燃そうか」
 加藤はストロブの傍に行つて火を燃した、恰度其時磨利子は眼を覺して、波子を呼ん
 だ、
 磨「波ちゃん、何か飲むものを頂戴ね」
 加「おゝ、眼が覺めたかね」
 磨利子は少し首を擡げて、
 磨「何人ですの」
 杯に藥を注ぎながら、

加「僕だ、加藤だ」

磨「貴下、何時から此の部屋に在したの」

加藤は薬を飲みながら、

加「まあ可い、薬を先へ飲み給へ、——甘味は恰度可いかね」

磨「え、」

加「僕は看護人に生れて来た様なものだ」

磨「波子は何處へ参りましたの」

加「波ちやんは眠て居るよ、昨夜十一時にね、僕は貴女の容體を聞きに来たのだよ
すると波ちやんは、全然疲れ切て居たから、僕が代て起て居てやる事にしたのだ
所が僕も寝て了つたのだよ、磨利さんもよく眠た様だが、今朝は何うだね」

磨「え、今朝は大層良う御座いますわ、——本統に貴下済みませんのねえ」

加「なアに、僕は舞踏會で夜明しをやる事などは、始終あるんだ、偶に病人の看護

をして起て居る位の事何んでもないさ、——夫れよりは僕磨利さんに鳥渡話し度
い事があるんだよ」

磨「何んな事です」

加「貴女困て居るんでしやう」

磨「困て居ると言つて、何う困て居ると被仰るの」

加「定めしお金が要ると思つてね、昨日来た時も、玄關に催促に来て居る奴があつ
たから、僕は叩きつけてやつたよ、でも、未だ全然は拂てないのだ、……僕も
正月で、つまらぬものを澤山買ったから、餘り充分には持て居ないが、然し、
茲に百圓餘り持て居るから、抽斗の中に入れて置きますよ、……ねえ貴女も何
うぞ可い正月をお迎えなさい」

多くの知人や友達が病める自分を顧みて呉れるものもない中に、増男の友人であれ
ばこそ、加藤も斯く許り親切なのであらうと磨利子も潜り落ちる涙を禁め得なかつ

た。

磨「本統に御親切は忘れませんよ、那樣御親切な方を、妾は曾か冷淡な無情な方だなんて言ひましたわねえ、妾のために終夜起て居て下すつた許りか、那樣に迄御心配下さるとは、本統に御禮の申様も御座いませんわ」

加「何も那樣に更つて言て呉れる程の事ぢやないよ、——時に磨利さん、僕がやつて見やうと思つて居る事を貴女知つてるかね」

磨「否え、言て御覽なさいまし」

加「今日は馬鹿に良い天氣だから、一番温い頃に僕と一緒に馬車で散歩して見やうぢやないか、爾うすれば、今夜又ぐつすりよく眠れるよ、……で僕は半月も母の所へ行かなかつたから、今日は母の所へ行て来て、温くなつた頃又やつて来やう、磨利さん夫迄待て居て下さい」

磨「え、妾も元氣を出して、今日は御一緒に行て見ましやうか」

加「元氣が出たら、一緒に行て見やう」

恰度其處へ波子が入て来た。

加「波ちやん、磨利さんは最うお目覺めだよ」

磨利子は波子の顔を見て、

磨「本統にお前お疲れたらうね」

波「いゝえ、少とも……」

磨「窓を開けて、日光を入れてお呉れ、妾も起て見やうと思つてるの」

波子は窓を開けて、外部の方を見下しながら、

波「あらお醫師さんが行しやいましたわ」

磨「本統にあのお醫師さん、毎日一番に見舞つて下さるのねえ、——あの加藤さん貴下お歸りになるなら、お醫師さんに扉を開けてあげて下さいましな、御願ひですから、——さア波ちやん、手助つて起してお呉れ」

加「ちや、又後程に、左様なら——」

鷹「え、又後程にね……」

加藤は出て行く前に磨利子を長椅子の上に寝してやつた、磨利子は起きて見やうとしたが、直に又倒れて了ふので、波子は傍に寄て来て磨利子を支えてやつて居る、醫師は静に入つて来た。

鷹「先生、お早う御座います、まア御親切に、恁んなに早く御見舞い下さつて、相濟ませんのね、——波ちゃんや、手紙が来て居やア仕ないか、下へ行って見て来てお呉れ」

波子は醫師に磨利子を任して下へ行つた。

鷹「脈を拜見しましやう、……何うですな氣分は」

鷹「善かつたり、悪かつたりで御座います、……體の工合が悪くつて、氣分の大層可い事も御座いますの、昨夜は最う死んで了ふかと思ひまして、お僧侶を頼み

にやらうかと思ひました位で御座いますわ、——妾最う悲しくつて、心配で仕方が御座いませんの僧侶が來つて下さるならば、恁んな悲しい事や、恐い事、死ぬ時の辛い思なぞは全然癒して下さるだらうと思つて居ります」

醫師は診察を終つて、

鷹「まア一體に佳い方です、春にでもなれば全然善くなるだらうと思つて居ます」

鷹「有難う御座いますわ、嘘は悪い事だとは申しますけれど、お醫師さんが病人に向て被仰る嘘許りは、神様でもお許しになると云ふ程ですからね、先生の御言葉を嬉しう思ひますわ、——あら、波ちゃん、夫れ何？」

恰度其處へ波子が何か持て入て来た。

波「何か貴女に來た贈物のやうですわ」

鷹「あ、今日は元日だったのねえ、あ、考へて見れば、去年の元日から以來、種々な事があつたのねえ……あ、考へて見れば去年の元日は、随分皆さんと笑つ

たり踊つたり仕たのねえ、あゝ何時になつたら彼様に笑つたり騒いだりする事が出来るでしやうねえ、先生」

慙う言ひながら、磨利子は波子の手渡した包を開いて見て、

磨「あら、郷田さんから指環を贈て下さいました、伊知地伯爵からは腕環をあゝ倫敦から贈て下さいましたのねえ、……本統にあの方が、妾の今の有様を御聞きになつたら、定めし吃驚なさる事でしょうねえ、……あら、ボン／＼が入て居たわ、殿方は物事に忘れつばいと云ひますけれど、爾う許りでもないのですわねえ、——ねえ先生、貴下にはお幼いお妹さんがお在りになると聞きましたが、爾うで御座いますか」

磨「えゝ、一人あります」

磨「では先生、此のお菓子をお小兒衆にお持ち下さいませんか、妾、最う、慙なもの食られませんか、——波ちやん、最う是れだけ？ 外に何も入て居なくつて

？」

波「ハイ、手紙が一本ありますわ」

磨「誰れからの」

磨利子は手紙を受取りながら、

磨「波ちやんや、此のお菓子の函を先生のお馬車の中に入れてお呉れ」

磨利子は手紙の封を切て讀んだ、夫れには次の様な事が書いてあつた。

一筆示し上り、扱とや、先日來度々御前様を御尋ね申候へども、御目にも掛れず残念に御座候、さりながら妾生涯に取つての目出度き席上には必ず御入り有之る事と存じ、私事、愈々元日を以て結婚いたす事と相成候、此品、岸田が私のために調へ呉れたるものに候が御目に掛け申候、尙ほ結婚の式は本日前九時マドレーヌ寺院に於て極く手軽く質素に擧げ度く候儘、御出下され候は嬉しく存上候、先は御知せ迄、かしこ

美知子より